

### (3) 第2遺構面

#### ① AB区溝 (SD)

##### SD2001 (第138図)

調査区南東隅部分に東西に延びる溝である。検出長7.84m、幅1.16m、深さ0.24mを測る。溝には石材が多量に検出した。

408は堺明石系の陶器のすり鉢である。409は肥前磁器の鉢である。

##### SD2003・SD2004・SD2007 (第139・140・141・142図)

SD2003 検出長25.28m、幅2.64m、深さは北側で1.22m、南側で深さ0.36mを測る。溝は直線的に延び、溝の深さは北から南に向けて底面の標高は下がっている。溝の北端部は調査区外より北へ延びている状況であった。

410は肥前系の磁器碗である。内外面に瓔珞の飾りを染め付ける。411は磁器碗である。412は土師器の涼炉である。413は土師器の灯明皿である。414は肥前系磁器の小瓶である。外面に蛸唐草文を描く。415は在地の阿波大谷産の有脚の受付皿である。416は風化した花崗岩製の空風輪である。

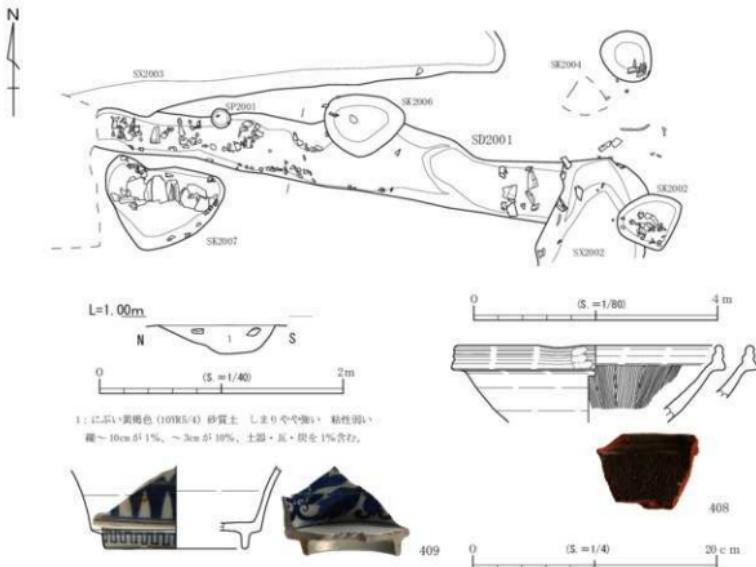
SD2004は検出長22.56m、幅2.24m、深さ0.94mを測る。溝は直線的に延び、溝の底面の標高は北から南に向けて下がっている状況であった。溝の南端部は攪乱により失われており、計測以上に延びていた可能性が高い。その北端部は調査区外にまで延びている状況であった。

417は肥前磁器の小碗である。外面に染付の草木を描く。418は瀬戸美濃系の磁器角小皿である。419は瀬戸美濃系の磁器の輪花碗である。内面に花・波を描く。420は磁器の小碗である。外面に葉の模様を描き、内面見込みに「大化年製」と染め付ける。421は磁器の碗である。底部に焼継が細い帯状で認められる。422は磁器の小碗である。見込みに「難」「江政」と描く。423は磁器の碗である。424は肥前産磁器の小瓶である。外面は蛸唐草文を染付している。19世紀代である。425は瀬戸美濃系の磁器の広東形碗である。426は瀬戸美濃系の磁器香炉である。427は磁器の皿である。内面見込みに鯉を描く。428は瀬戸美濃系の磁器水滴である。429は磁器皿である。見込みに「壽」を装飾的に印刻する。430は陶器の大形の受付皿である。受け部は口縁部より低く、高台部を作り出す。431は土師質の炉である。432は石製の硯である。433は瀬戸美濃系の蓋である。19世紀代の年代である。434は淡路眾平焼の陶器小皿である。黄釉で底部内面見込みに龍を木型で打ち込む。底部外面底部には目跡がある。天保年間(1830～1844)頃から小物を生産している。435は磁器の蓋である。436・437・438は陶器有脚の受付皿である。436・438は在地の阿波大谷産である。437は京信楽系である。受け部の底は脚部底面まで深くなっている。439は肥前陶器の輪花皿である。19世紀の年代である。440は土瓶の陶器蓋である。

441は肥前陶器の香炉である。三脚がつく。442は在地の阿波大谷焼の徳利である。外面肩部に「内」「申」などを刻む。443・444は堺明石産の陶器すり鉢である。445は陶器の大形甕である。

SD2007は検出長16.96m、幅2.24m、深さは北側で1.08m、南側で0.68mを測る。溝は直線的に延び、溝の深さは北から南に向けて底面の標高は下がっている。溝の北端部は調査区外より北へ延びている状況であった。

446は在地の阿波大谷産の受付皿である。447は磁器の鉢である。外面に折鶴の染付を描く。



第138図 SD2001 遺構図・出土遺物

調査区の範囲では、多くが擾乱によって失われており、第2遺構面の様子は判然としないところが多い。しかしながら、SD2003・SD2004・SD2007のような大規模で直線的な溝は、他にはない大規模で特徴的な遺構である。この3条の溝は土地・敷地を東西に区画する機能を有していたと考えられる。

## ② AB区土坑 (SK)

### SK2004 (第143図)

平面椭円形状の土坑で、直径0.9m、深さ0.16mを測る。446は肥前系の磁器碗である。

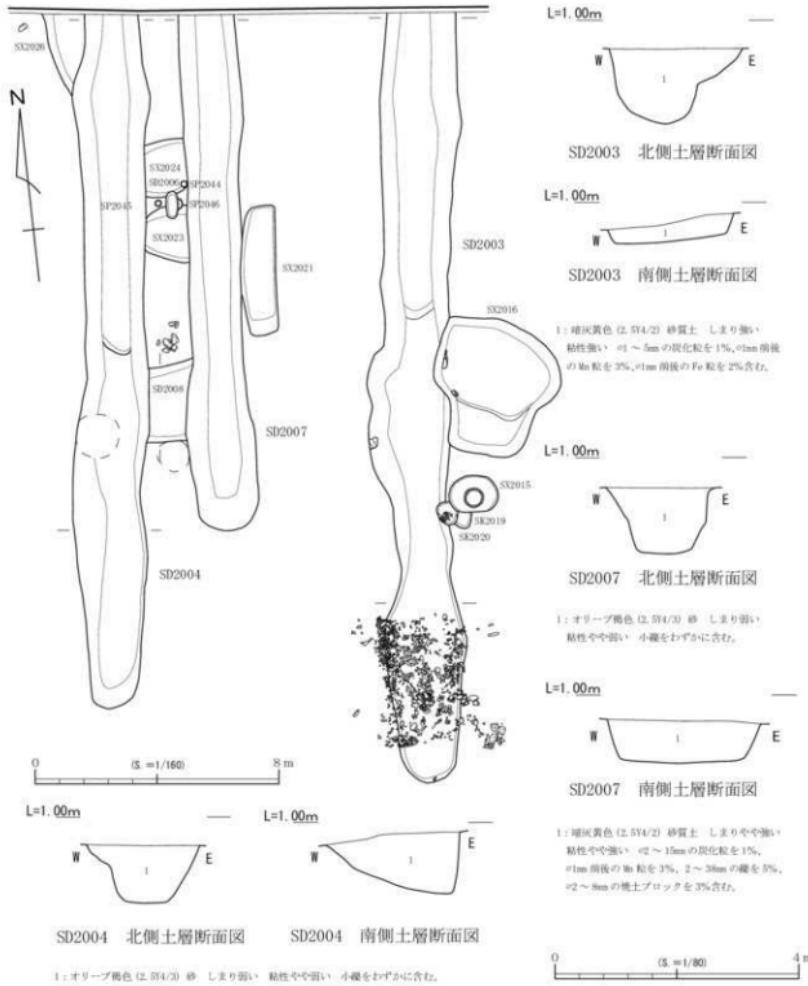
### SK2005 (第144図)

平面椭円形状の土坑で、東西長1.48m、南北長1.36m、深さ0.2mを測る。447は肥前系の磁器の碗である。

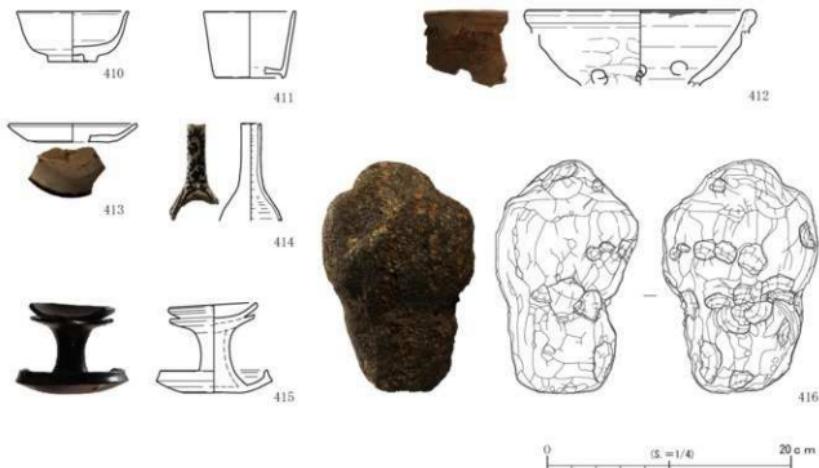
### SK2007 (第145図)

平面不正形状で、東西長1.96m、南北長1.34m、深さ0.38mを測る。土坑内には東西方向に延びる石列を検出した。

448は京信楽系の陶器鉢である。



第 139 図 SD2003・SD2004・SD2007 遺構図



第140図 SD2003出土遺物

#### SK2009・SK2010（第146図）

SK2009は南北検出長0.5m、東西幅0.54m、深さ0.22mを測る。遺構南半は攪乱によって失われている。450は磁器の皿である。451は土師器の鍋である。452は瀬戸美濃産の練鉢である。

SK2010は南北検出長1.44m、検出幅0.54m、深さ0.2mを測る。449は磁器の碗である。

#### SK2011（第147図）

平面梢円形状の土坑である。東西長0.8m、南北長0.94m、深さ0.46mを測る。土師器の表の口縁部片がほぼすべて残存しており、逆さ向きに据えられていた。453は土師器の大形表である。口縁部外面で帯状に格子状の文を施す。

#### SK2016（第148図）

平面梢円形状の土坑で、長軸検出長1.56m、幅0.92m、深さ0.14mを測る。454は萩産の陶器、ピラ掛け碗である。19世紀初頭の年代である。455は関西系の土師質の土瓶である。

#### SK2021（第149図）

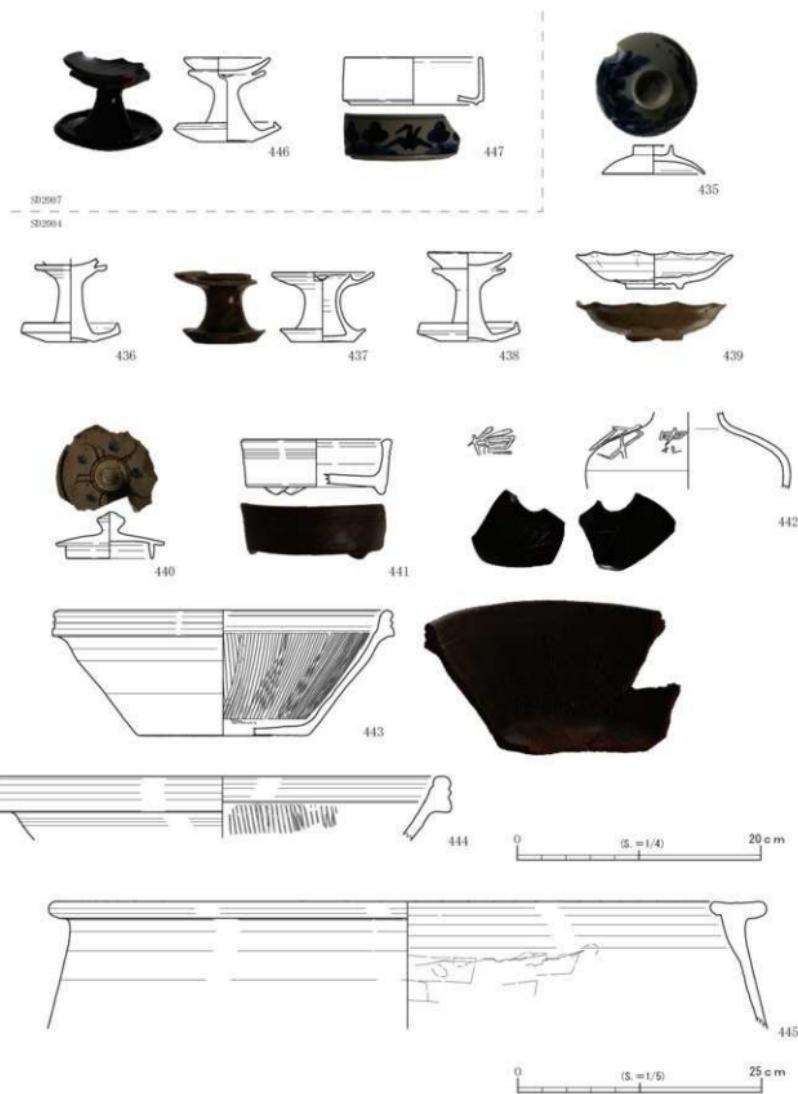
平面隅丸方形形状の土坑で、南北検出長1.32m、東西幅1.22m、深さ0.2mを測る。内部から石を多数検出した。

456は瀬戸美濃系の磁器碗である。内面口縁部に雷文を巡らす。457は肥前系の磁器碗である。458は肥前系の磁器m広東形碗である。459は堺明石系の陶器すり鉢である。

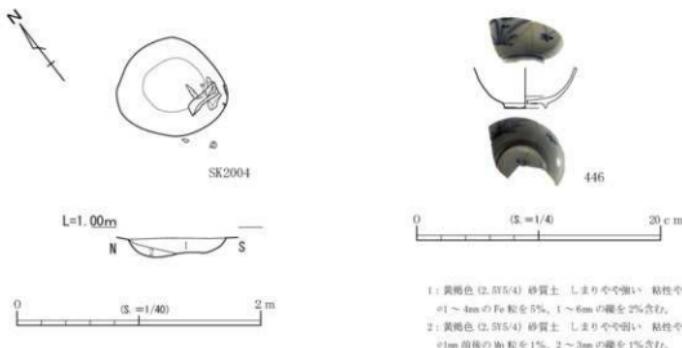


0 (S = 1/4) 20 cm

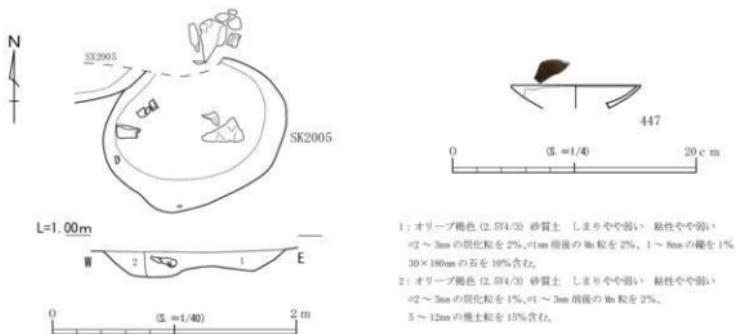
第 141 図 SD2004 出土遺物 1



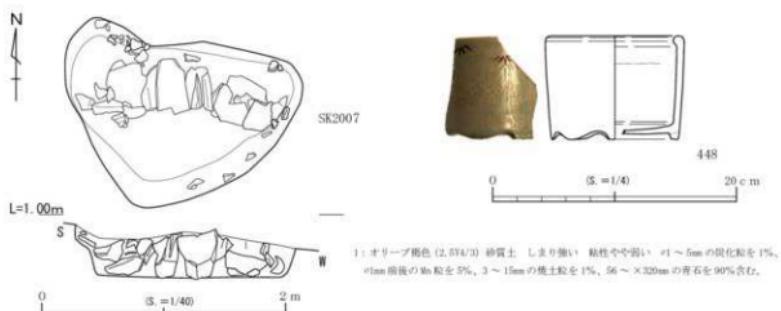
第 142 図 SD2004・SD2007 出土遺物 2



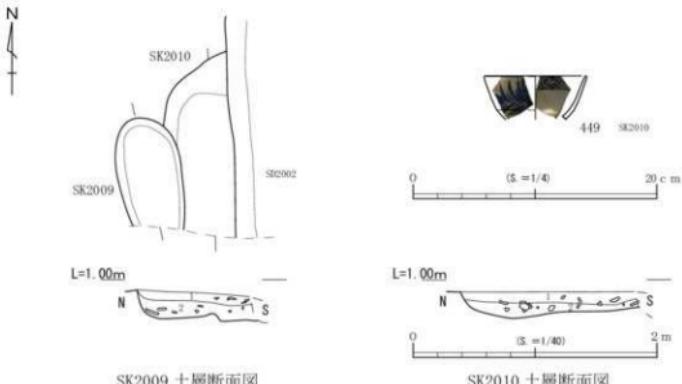
第 143 図 SK2004 遺構図・出土遺物



第 144 図 SK2005 遺構図・出土遺物



第 145 図 SK2007 遺構図・出土遺物

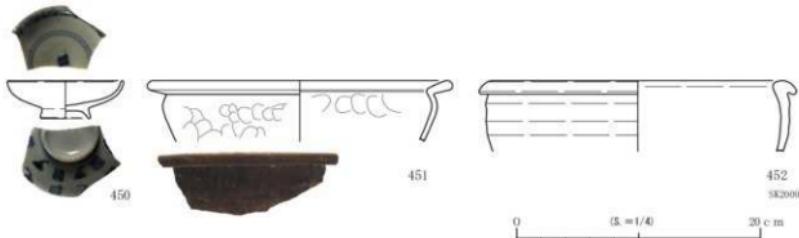


SK2009 土層断面図

SK2010 土層断面図

- 1: 墓灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 しまりやや強い・粘性やや弱い  
a1 ~ 13mm の炭化粒を 2%、4cm 前後の Mn 粒を 2%、1 ~ 25mm の礫を 7%、  
a2 ~ 4mm の Fe 粒を 2%、1 ~ 20mm の燒土粒を 10%、25 ~ 40mm の瓦片を 3% 含む。  
2: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 しまりやや強い・粘性強い  
a1 ~ 18mm の炭化粒を 2%、4cm 前後の Mn 粒を 2%、1 ~ 20mm の礫を 2%、  
1 ~ 23mm の燒土粒を 10%、32 ~ 105mm の瓦片を 3% 含む。

- 1: 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 しまり強い・粘性やや弱い  
a1 ~ 5mm の炭化粒を 2%、4cm 前後の Mn 粒を 1%、1 ~ 32mm の礫を 1%、  
1 ~ 18mm の燒土粒を 2%、30X18mm の瓦片を 3% 含む。  
2: 墓灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 しまりやや強い・粘性やや弱い  
a1 ~ 3mm の炭化粒を 1%、4cm 前後の Mn 粒を 1%、1 ~ 54mm の礫を 10%、  
1 ~ 13mm の燒土粒を 3%、65 ~ 97mm の瓦片を 5% 含む。



第 146 図 SK2009・SK2010 遺構図・出土遺物

### SK2038 (第 150 図)

平面不正形状の土坑で、南北検出長 0.2m、東西幅 1.48m、深さ 0.2m を測る。遺構は調査区外南へ延びておる。遺構内から多数の石を検出した。460 は瀬戸美濃系の青磁釉の磁器碗である。

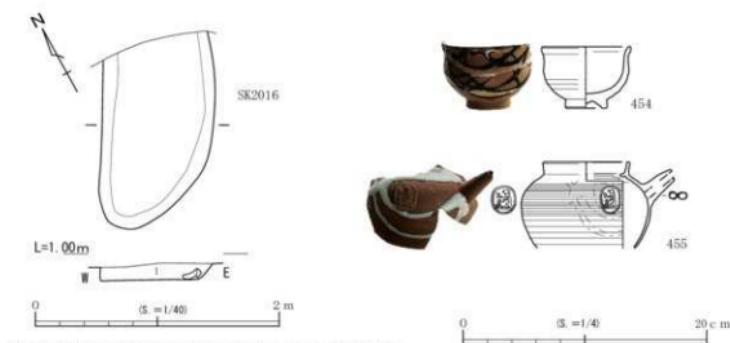
### SK2039・SK2040 (第 151 図)

SK2039 は東西長 2.22m、南北検出長 1.3m、深さ 1.4m を測る。遺構は調査区外南へ延びており、平面形状は隅丸方形状であろうと推定する。462 は瀬戸美濃系の壺である。外面に貼り付けた把手を有する。463 は肥前系の磁器碗である。464 は瀬戸美濃系の天目茶碗である。465 は京信楽系の植木鉢である、底面見込みに穿孔を有する。466 は軟質瓦質の火鉢である。



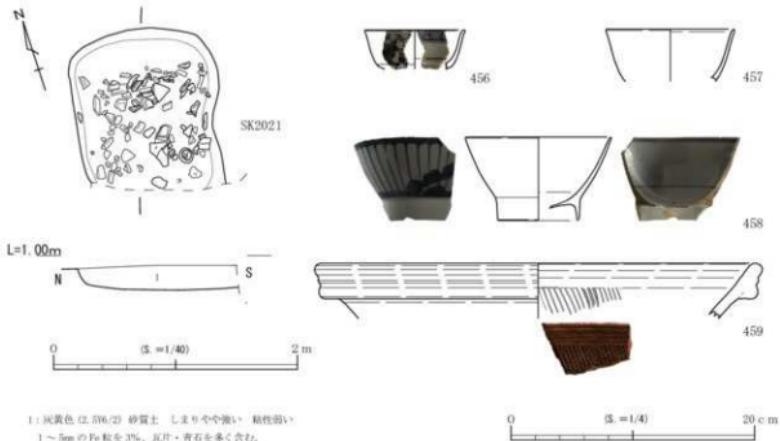
- 1: 深オーブ色 (3.5S/2) 砂質土 しまり強い、粘性やや弱い。01mm 前後の炭化粒を 1%未満、01mm 前後の Fe 粒を 2%、1 ~ 14mm の礫を 10%含む。  
 2: オリーブ褐色 (2.5V4/3) 砂質土 しまり強い、粘性やや弱い。01 ~ 10mm の炭化粒を 3%、01 ~ 3mm の Mn 粒を 3%、小礫をわずかに含む。  
 3: オリーブ褐色 (2.5V4/3) 砂質土 しまりやや弱い、粘性やや弱い。01 ~ 6mm の炭化粒を 1%未満、01mm 前後の Mn 粒を 3%、2 ~ 8mm の礫を 3%、3 ~ 8mm の燒土粒を 1%含む。層全体に石炭・瓦片・青石等が散在。

第 147 図 SK2011 遺構図・出土遺物



- 1: にがい黄色 (2.5V6/3) 砂質土 しまり強い、粘性弱い。01 ~ 15mm の炭化粒を 3%、2 ~ 4mm の Fe 粒を 5%、3 ~ 26mm の礫を 3%含む。

第 148 図 SK2016 遺構図・出土遺物



第149図 SK2021 遺構図・出土遺物

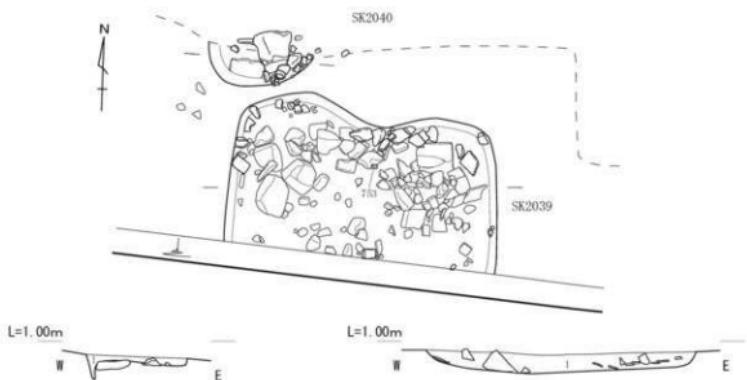


第150図 SK2038 遺構図・出土遺物

SK2040は東西長0.84m、南北検出長0.3m、深さ0.2mを測る。遺構北半は攪乱によって失われている。遺構内には一辺15cmを超える石材などを検出した。461は在地の阿波大谷の徳利の底部である。

#### SK2061 (第152図)

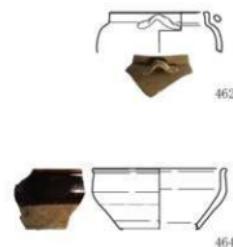
平面円形状と推定でき、南北検出長0.7m、東西検出長0.4m、深さ0.24mを測る。遺構は調査区外の東へ延びていた。467は磁器の小碗である。468は在地の阿波大谷の徳利である。469は堺明石産の陶器すり鉢である。



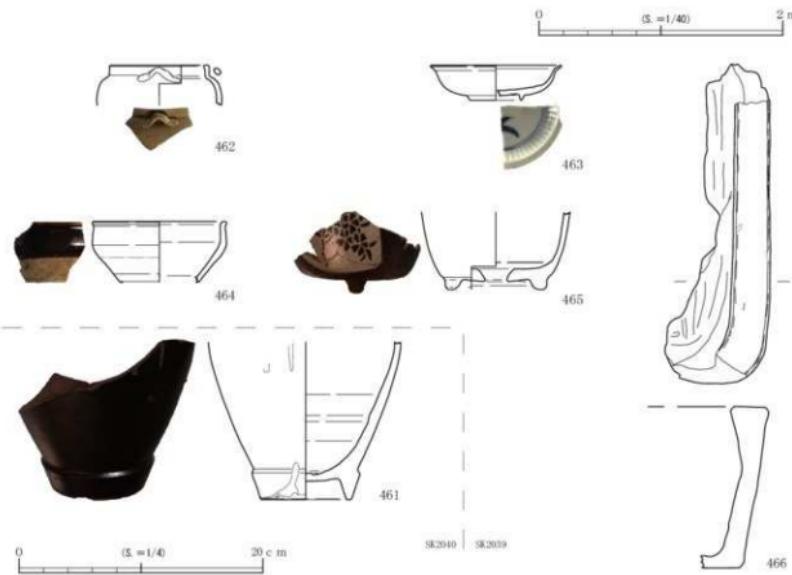
I: 墓灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 しまりやや弱い 粘性強い  $\phi 1 \sim 30\text{mm}$  の礫化粘土を5%。  
 61mm 前後の Mn 颗を2%,  $2 \sim 43\text{mm}$  の礫を3%,  $270 \times 90\text{mm}$  の石を5%。  
 $62 \sim 110\text{mm}$  の陶器片を2%,  $30 \sim 100\text{mm}$  の瓦片を2% 合む。

I: 墓灰黄色 (2.5Y4/2) シルト しまり弱い 粘性強い  $\phi 2 \sim 6\text{mm}$  の礫化粘土を1%。  
 61mm 前後の Mn 颗を2%,  $5 \sim 240\text{mm}$  の礫を20%,  $25 \sim 120\text{mm}$  の瓦片を20% 合む。

SK2040 断面図



SK2039 断面図



第151図 SK2039・SK2040 遺構図・出土遺物



- 1: 塗灰黄色 (2.5E5/2) 砂質土 しまり弱い 粘性やや強い 41mm 前後の Mn 棒を 10%。  
41mm 前後の Mn 棒を 7%, 2 ~ 6mm の繊を 3% 含む。  
2: 灰色 (3Y4/1) 砂質土 しまり弱い 粘性弱い 41 ~ 8mm の繊を 2%。  
60 ~ 110mm の未片を 10%, 50 ~ 130mm の未片を 15% 含む。

### ③ AB 区柱穴 (SP)

SP2004 出土遺物である。(第 153 図)

470 は関西系の陶器土瓶の蓋である。鉄軸を外面に掛ける。471 は焼塙壺である。輪積み成形を行い、布目は見えなくなるくらい指押圧で整えている。472 は瀬戸美濃系の磁器碗である。外面に草木を描く。473・474 は有脚の受付皿である。473 は京信楽系であり、474 は在地の阿波大谷産である。475 は在地の阿波大谷の徳利である。外面に「増」の刻印あり。476 は備前産の陶器すり鉢底部である。内面見込みのすり目が渦巻き状となる。

そのほかの柱穴から遺物が出土した。(第 154 図) 477 は、SP2010 出土遺物で、肥前系の磁器皿である。478 は SP2013 出土遺物で、在地の阿波大谷焼の甕である。479 は SP2020 出土遺物で、瀬戸美濃系の磁器碗である。480 は SP2022 出土遺物で、京信楽系の土瓶の蓋である。摘み欠損している。481 は SP2040 出土遺物で、肥前唐津産の二彩鉢の口縁部片である。

### ④ AB 区性格不明土坑 (SX)

SX2001・SX2002 (第 155・156 図)

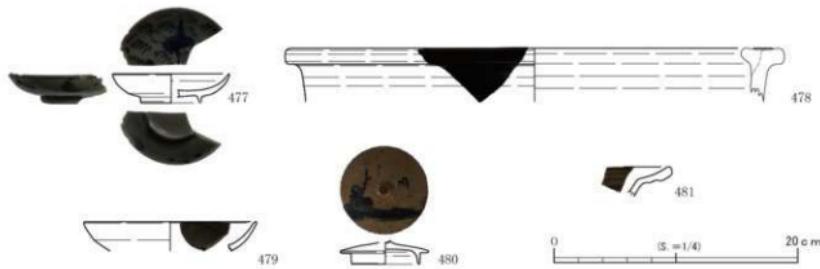
SX2001 は東西検出長 2.54m、南北検出長 1.88m、深さ 0.16m を測る。遺構内で石を多数検出したが、長さ 0.8m 以上となる石列を検出した。石列は調査区外の東へ延びている状況である。482 は青銅製の煙管の吸口である。形状は肩を設げず、口付まで次第に細くなっている。18世紀後半から19世紀にかけての年代である。483 は土師質の焰烙である。外面に煤が付着する。484 は磁器皿である。口縁部内面に雷文を巡らし、外面に蛸唐草文を描く。485 は在地の阿波大谷の甕である。



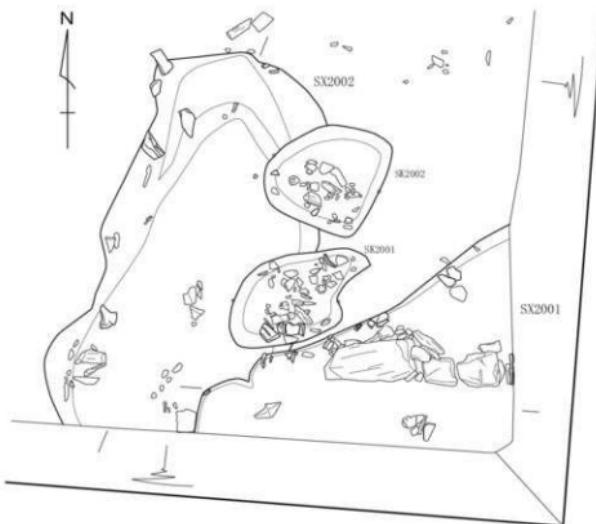
- 1: にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土 しまり強い、粘性弱い  
 ≈2mm 前後の炭化粒を 1% 未満、小礫をわずかに含む。  
 2: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 しまり強い、粘性やや弱い  
 ≈1mm 前後の Mn 粒を 3%、小礫をわずかに含む。



第 153 図 SP2004 遺構図・出土遺物



第 154 図 第 2 遺構面 SP 出土遺物



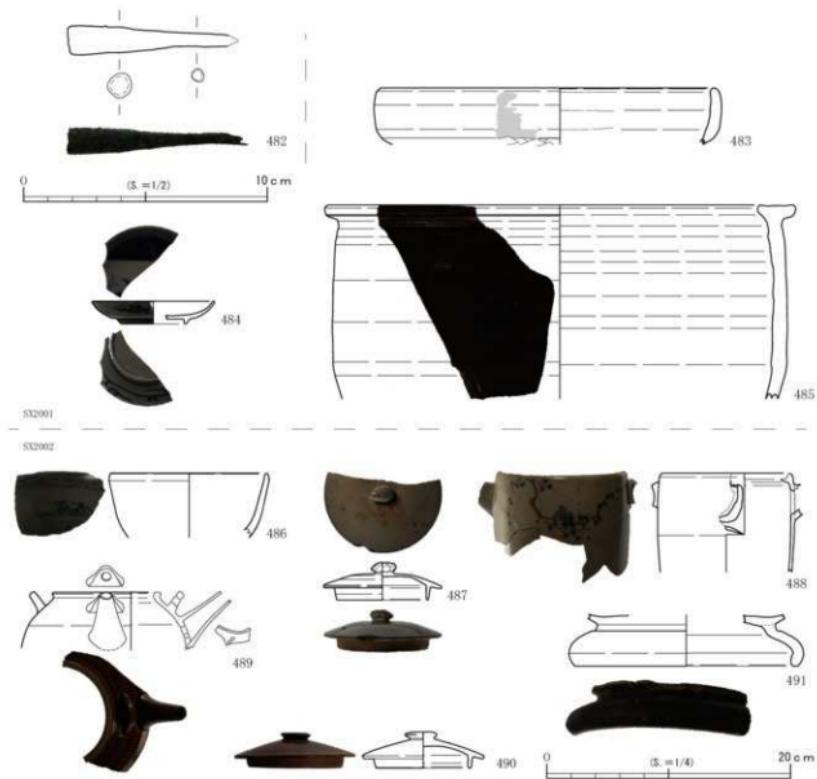
- 1: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 しまりやや弱い 黏性強い  $\phi 1 \sim 5\text{mm}$  の炭化粒を 1%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の砂粒を 2%,  $1 \sim 65\text{mm}$  の礫を 30%,  $1 \sim 23\text{mm}$  の他土粒を 2%,  $21 \sim 92\text{mm}$  の瓦片を 3% 含む。  
 2: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 しまりやや弱い 黏性強い  $\phi 2 \sim 8\text{mm}$  の炭化粒を 1%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の砂粒を 2%, 小礫・土器細片をわずかに含む。

SX2001 断面図

- L=1.00m
- 
- 1: 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質土 しまり弱い 黏性やや強い  $\phi 1 \sim 25\text{mm}$  の炭化粒を 2%,  $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  の砂粒を 1%,  $0.1 \sim 80\text{mm}$  の礫を 5%,  $1 \sim 25\text{mm}$  の他土粒を 1%,  $15 \sim 45\text{mm}$  の瓦片を 1% 含む。  
 2: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 しまりやや弱い 黏性強い  $\phi 1\text{mm}$  未満の砂粒を 2% 含む。  
 3: オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 砂質土 しまりやや弱い 黏性強い  $\phi 1 \sim 5\text{mm}$  の炭化粒を 1%,  $\phi 1\text{mm}$  前後の砂粒を 2%,  $80 \times 35\text{mm}$  の土器片を 1% 含む。  
 4: 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土 しまり弱い 黏性強い  $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  の炭化粒を 1% 未満,  $\phi 1\text{mm}$  前後の砂粒を 7%,  $1 \sim 33\text{mm}$  の礫を 1%,  $28 \sim 90\text{mm}$  の瓦片を 2% 含む。

SX2002 断面図

第 155 図 SX2001・SX2002 遺構図



第156図 SX2001・SX2002出土遺物

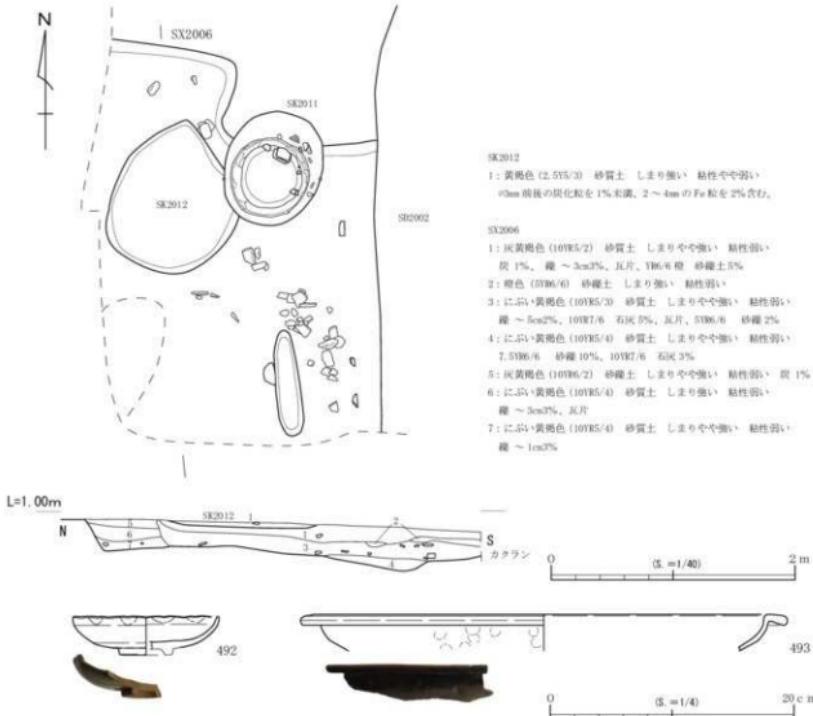
SX2002は長さ3.24m、幅1.66m、深さ0.36mを測る。SX2001より先行して形成され、石を多数検出した。

486は瀬戸美濃系の磁器の碗である。487は陶器の蓋である。摘みを巻貝の形にし、外面に白釉を掛ける。488は肥前系の磁器水注である。489は陶器土瓶である。490は関西系の陶器の蓋である。外面に飛鉈文、山形状である。491は軟質瓦質の火鉢である。

#### SX2006(第157図)

南北検出長3.26m、東西検出長2.4m、深さ0.36mを測る。平面形状は不整形で、遺構内から多数の石を検出した。

492は瀬戸美濃系の陶器輪花皿である。493は土師質の焰烙である。外面に焦げが付着する。



第157図 SX2006 遺構図・出土遺物

### SX2008 (第158図)

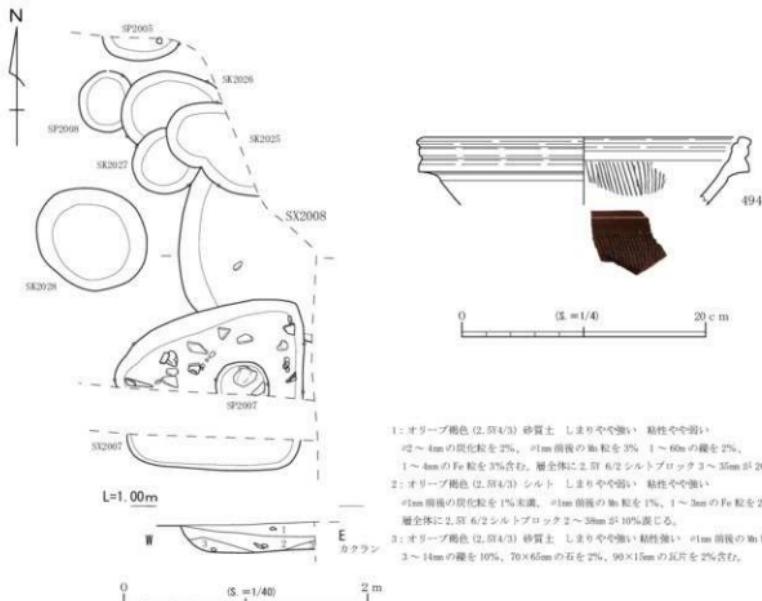
平面楕円形状と推定され、東西検出長 1.12m、南北検出長 1.2m、深さ 0.22m を測る。494 は堺明石産の陶器すり鉢である。すり目は 9 条 / 2.7cm である。

### SX2010 (第159図)

平面楕円形状で長軸長 1.46m、短軸長 1.16m、深さ 0.42m を測る。遺構内から木材や石を数点検出した。495 は土師器の皿である。

### SX2011 (第160図)

平面円形状と推定でき、南北長 1.74m、東西検出長 1.12m、深さ 0.32m を測る。遺構内部は青石・碟や瓦・陶器碎片が多数を占めていた。496 は土師器の皿である。底部外面に板目の痕跡がある。497 は泥岩の砥石である。498 は肥前系磁器の鉢である。



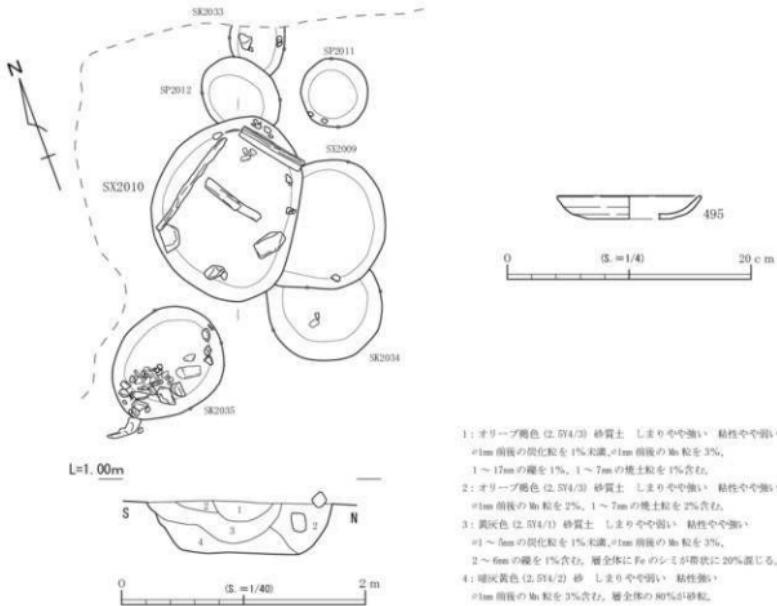
第 158 図 SX2008 遺構図・出土遺物

#### SX2012（第 161 図）

平面不整形状で、南北検出長 2.16m、東西幅 2.14m、深さ 0.4m を測る。遺構の南側は調査区外の南にまで延び、南東側は攪乱により失われていた。499 は焼塙壺である。輪積み成形されている。

#### SX2014（第 162 図）

SX2014 は瓦積みの枠形穴蔵である。その用途は貯蔵施設と考えられ、平面が残存長南北 2.5m、残存長東西 1.2m、深さ 0.58m を測る遺構である。その遺構の上面の北西部で東西 1.2m、南北 1.4m の L 字状の石列が認められた。石列は内側に面をもっており、この石列の残存状況から、復元すると本来は平面方形の内側に面をもつ石組みであったと思われる。この石組の内側に瓦積みの施設を検出した。施設で使用された瓦は、正方形の磚のように平らで反りがないものであった。その規模は一辺 21.9cm の方形状、厚みは 2.9cm である。この瓦を壁面では立てて使用し、その隅は丸くなるよう瓦を重ねていた。底では瓦を二重に整然と敷き詰めて床面としていた。東側の壁面に使用された瓦の多くが失われていたが、一部残存しており、そこから内法の東西 80cm、南北 1.4m を測ることができた。500 は磁器のそば口である。



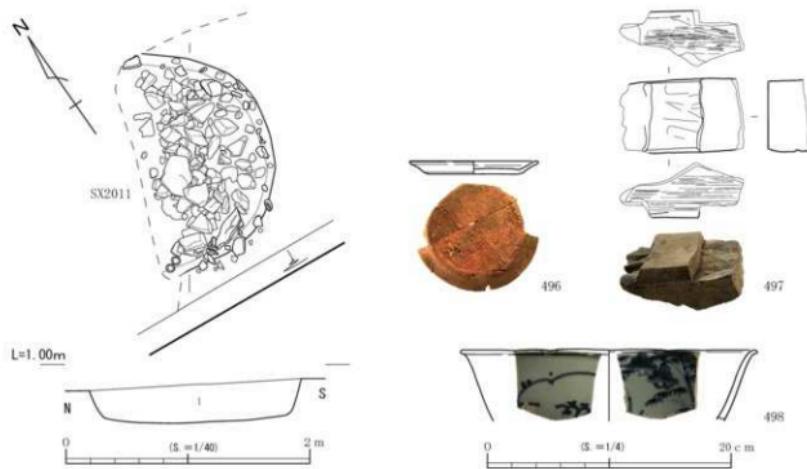
第 159 図 SX2010 遺構図・出土遺物

### SX2015（第 163 図）

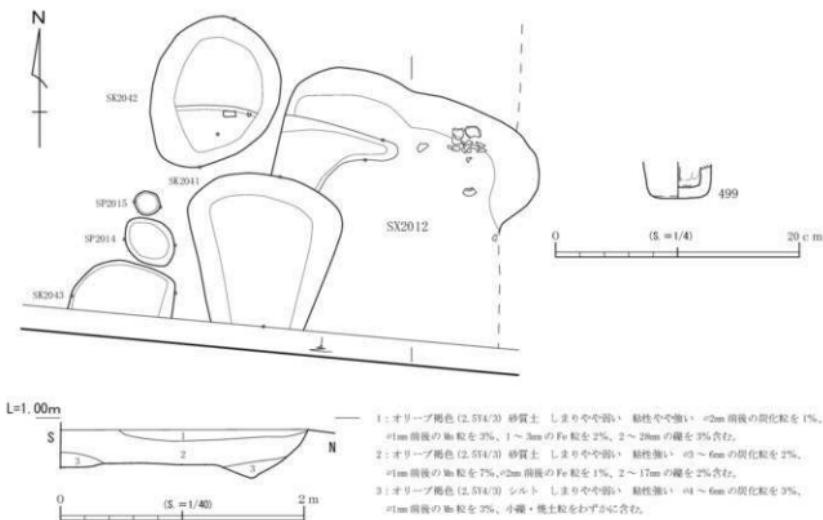
発掘調査当初は土坑としていたが、井戸跡と判明した。井戸跡の東西長 1.66m、南北長 1.2m を測る。井戸枠は直径 0.64m を測る。深さは 0.76m まで掘削したが、以下は不明である。井戸枠は土師質土管で作られていた。井戸跡は明治遺構の年代と考えられるが、掲載遺物は古く、501 は青磁片である。502 は肥前陶器の皿である。17 世紀の年代である。

### SX2016（第 164・165・166・167 図）

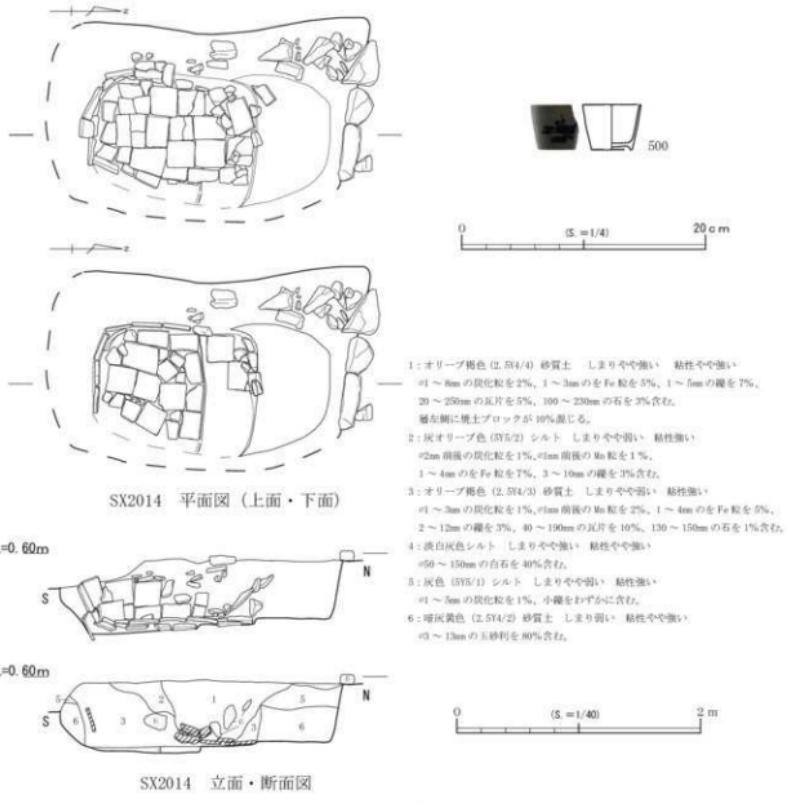
平面不整円形状で、南北長 4.34m、幅 4.2m、深さ 0.76m を測る。SD2003 より後に形成される。503 は京信楽系の磁器の輪花碗である。口縁部外面に草の染付を配する。口唇部に刻み目をつける。504 は磁器上瓶である。505 は磁器の壺である。506 は在地大谷の陶器植木鉢である。外面に黒釉を掛けている。507 は瀬戸美濃産の磁器香炉である。508 は在地の阿波大谷の徳利である。肩部に「新」「壺」など印刻する。509 は瀬戸美濃産の練鉢である。510 は肥前系の磁器蓋である。511 は磁器の小碗である。512 は瀬戸美濃系の磁器端反碗である。外面と内面見込みに草木を染め付ける。513 は瀬戸美濃系の磁器の小碗である。体部外面 5 箇所に丸の内側に松・梅・菊を染め付ける。514 は京信楽系の



第160図 SX2011 遺構図・出土遺物



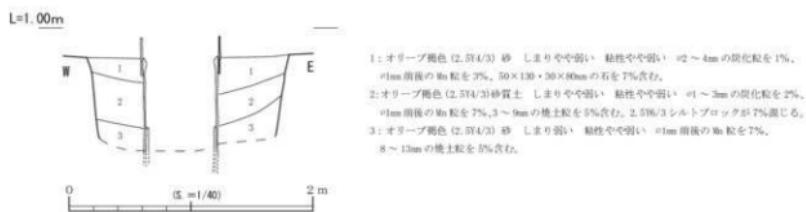
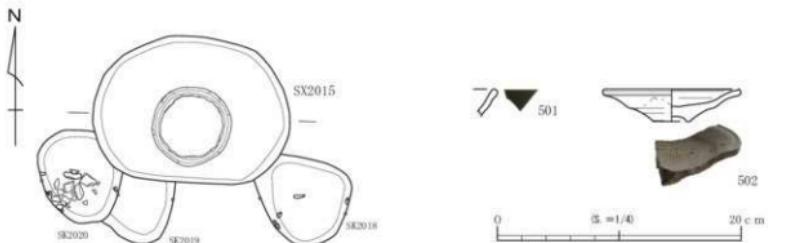
第161図 SX2012 遺構図・出土遺物



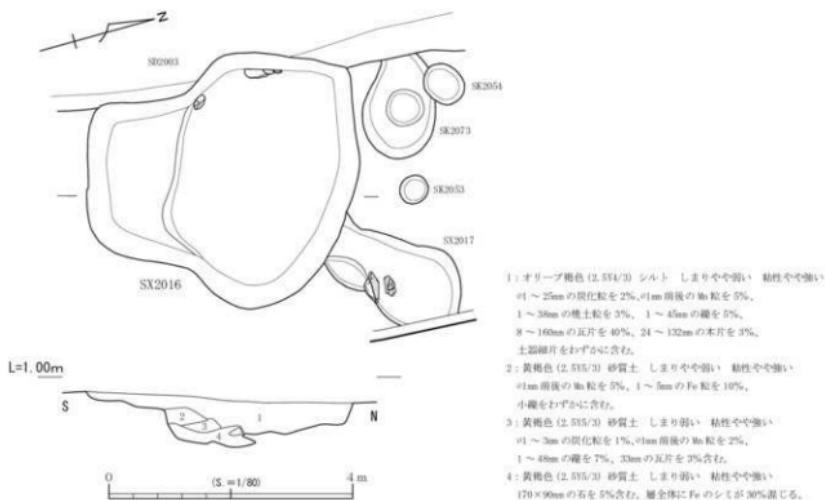
第162図 SX2014 遺構図・出土遺物

磁器の碗である。515は京信楽系の磁器碗である。516は瀬戸美濃系の磁器の小碗である。外面に竹筆と魚を染め付ける。517は白磁の碗である。外面に型押しで梅を2箇所に配する。518は肥前系の磁器碗である。519は瀬戸美濃産の陶器広東形碗である。菱形と丸文を交互に配する特徴的な碗である。19世紀前半の年代である。520は肥前系の磁器皿である。内面見込みに五弁花を印判する。521は瀬戸美濃系の磁器皿である。見込みに印判を押す。522は肥前系の磁器皿である。内面に草花の絵を染め付ける。焼締が施されている。

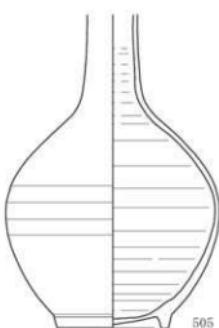
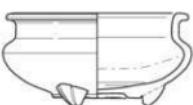
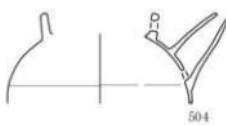
523は土重である。524は土師質の焜炉のひとつ涼炉である。525は土師質の火鉢、527は土師質の炉である。526・528は陶器すり鉢である。526は堺明石産、528は明石産で見込みのすり目が特徴である。



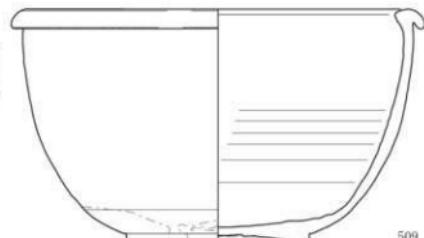
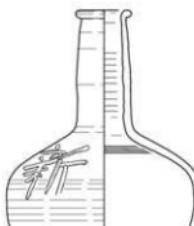
第 163 図 SX2015 遺構図・出土遺物



第 164 図 SX2016 遺構図



鼎  
耳  
吉



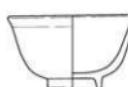
第 165 図 SX2016 出土遺物 1



510



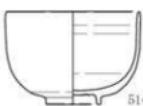
511



512



513



514



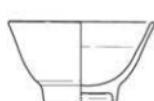
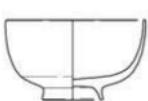
515



516



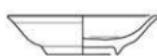
517



518



519



520



521



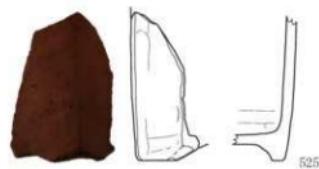
522

0 (5 = 1/4) 20 cm

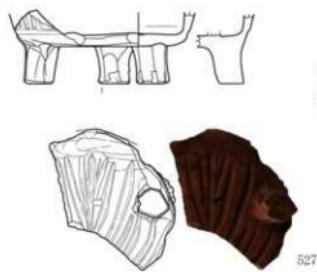
第 166 図 SX2016 出土遺物 2



0 (S = 1/2) 10 cm



526



528

0 (S = 1/4) 20 cm

第 167 図 SX2016 出土遺物 3

#### SX2018・SX2019（第 168・169 図）

SX2018 は長軸長 2.4m、短軸長 1.88m の平面橢円形状で、深さ 0.16m を測る。529 は土師器の皿である。口縁部内外面に焦げ目付着する。灯明皿である。

SX2019 は東西長 1.2m、南北検出長 0.98m、深さ 0.52m を測る。遺構の北半は調査区外の北へ延びているが平面円形状と思われる。3 層目からは石や瓦片が出土した。

530 は備前産の人形徳利である。531 は瀬戸美濃系の磁器端反碗である。外面に草木と魚を配し、内面見込みに葉を一枚描く。布袋の文を貼り付ける。532 は堺明石産の陶器すり鉢である。533 は明石産の陶器すり鉢である。見込み内面のすり目が特徴である。

#### SX2022（第 170 図）

南北検出長 6.24m、東西検出長 4.56m、深さ 0.58m を測る。534・535・537・538 は土師器の皿である。534・535 は内外面に焦げ目が付着する。灯明皿である。536 は瀬戸美濃産の陶器の仏飯器である。537 は指押さえが顕著である。538 の底部に回転糸切り調整を施す。

539 は肥前産の陶器皿である。内面見込みに蛇ノ目軸はぎ、凹形高台を有する。18 世紀後半から量産されている。540 は壺や甕など陶器大形器種の底部である。541 は京信楽系の陶器小碗である。外面に扇や弓を描く。542 は瀬戸美濃系の磁器碗である。543 は陶器の大皿である。

#### SX2025（第 171 図）

平面円形状で直径 1.76m、深さ 0.34m を測る。544 は器種不明の土師質である。545 は備前系の壺である。

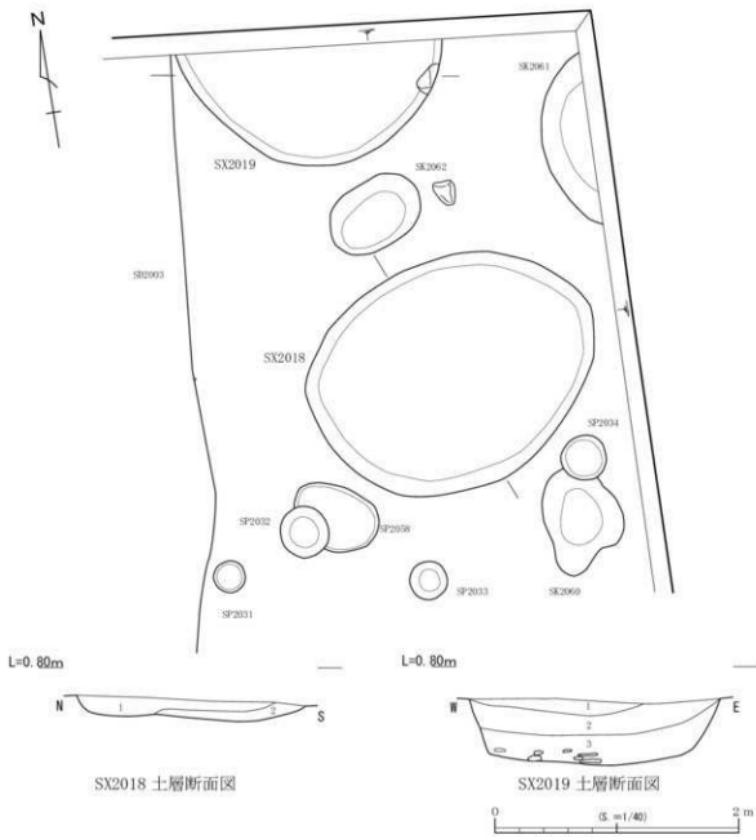
#### SX2027（第 172 図）

平面不整形形状の土坑である。その規模は南北長 3.0m、東西長 3.14m、深さ 0.4m を測る。遺構内から多量に石塊を検出した。

546・547・550・552・553 は陶器溝縁皿である。内面見込みに足付ハマ溶着痕があり、高台部貼り付け成形を行っている。17 世紀後半の年代である。548・549 は土師器の皿である。口縁部に焦げ目が付着する。灯明皿である。551 は陶器の三彩鉢である。554 は土師質の焙烙である。

#### SX2029（第 173・174・175 図）

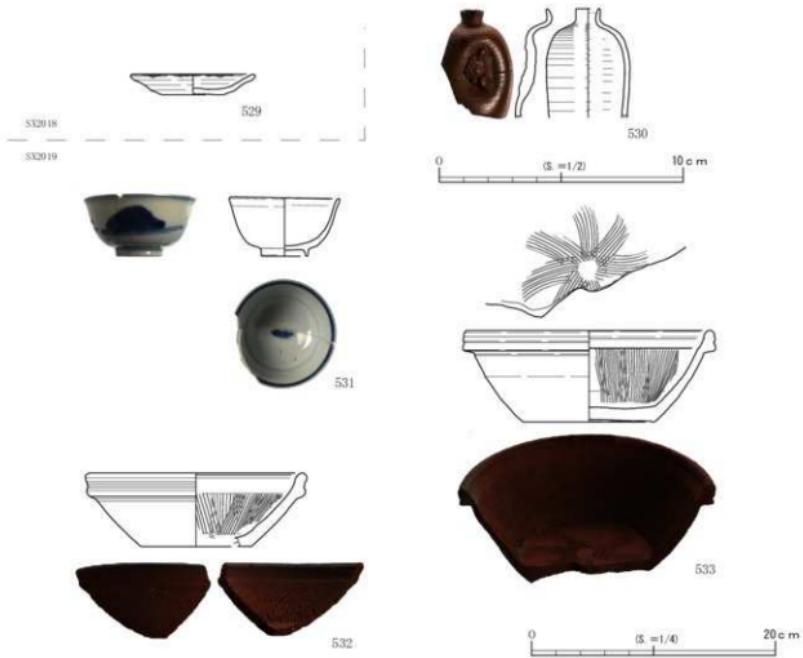
第 2 遺構面下層で SX2029 を検出した。SX2029 は長さ約 6m、幅約 4m の楕円形状の範囲であり、明確な遺構の落ち込み、掘形は認められなかった。ただし、遺構の北辺部分で、最大で幅 0.6m、長さ 0.8m の大きさの石群が列をなして長さ約 6m まで延びていた。石列の並びが掘形の可能性もある。そしてその石列の内に多くの遺物が出土した。特にカワラケが多く出土した。カワラケの規模は直径 9.7 cm～9.8cm とほぼ同大であった。カワラケは幅 1.6m、長さ 4.4m の範囲で北西から南東にかけて帯状に広がっていた。カワラケ全体を見ると、大きく東西で 2 つに分けられる。図に破線によって分けた。西は幅 1.6m、長さ 2.6m の範囲であり、カワラケの色調が 7.5YR7/4 にぶい橙色であった。または薄い茶色のようである。形を保って出土しているものが多い。東は幅 1.0m、長さ 1.8m の範囲であり、カワラケの色調が 2.5Y7/3 浅黄色であった。または淡赤褐色である。西のカワラケと比べ、東のカワラ



1: 深オリーブ色 (5Y4/2) シルト しまりやや強い、粘性強  
い ～ 1mm の鉄化粒を 3%, 0mm 前後の 石粉を 10%。  
1 ～ 5mm の Fe 粒を 20%、小種をわずかに含む。  
2: 灰色 (10Y5/1) シルト しまりやや弱い、粘性強  
い 層全体に Fe のシミが 20% 蔵じる。

1: 深オリーブ色 (5Y4/1) シルト しまりやや弱い、粘性強  
い 0.2 ～ 7mm の鉄化粒を 1% 含む。層全体に Fe のシミが 3% 蔵じる。  
2: 深オリーブ色 (2.5Y4/1) シルト しまり弱い、粘性強  
い 0.1 ～ 4mm の鉄化粒を 1% 含む。層全体に Fe のシミが 3% 蔵じる。  
3: オリーブ色 (5Y3/2) シルト しまり弱い、粘性強  
い 0.2 ～ 4mm の鉄化粒を 2%, 0mm 前後の 石粉を 5%, 40 ～ 80mm の石を 5%。  
32 ～ 165mm の瓦片を 10%, 12 ～ 85mm の木片を 7%。層右側に鉄片を 10% 含む。

第 168 図 SX2018・SX2019 遺構図



第 169 図 SX2018・SX2019 出土遺物

ケは破損しているものが多い。

カワラケの枚数は破片もあり正確な数は不明であるが、カワラケ一枚の重さが約 55 g であることから、西で出土したカワラケの重さ合計 6,760 g から約 123 枚分、東で出土したカワラケの重さ合計 4,540 g から約 825 枚分と推定する。比率はおよそ東 1 に対して西 1.5 であった。

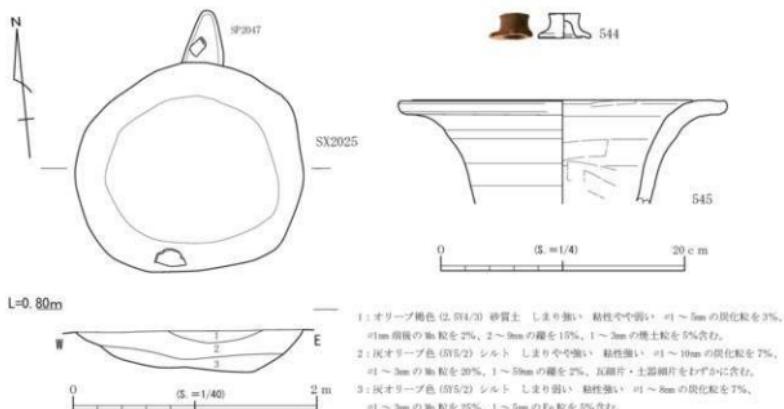
カワラケの他、磁器の碗、仏飯器、蓋物の碗や、土製人形やままごと道具、陶器のすり鉢や甕などが出土している。蓋物(566)は石の上に蓋をして正置された状態で出土した。また蓋物の内側は空いていた。

SX2029 の性格については非日常の祭祀行為であると思われるが、不明な点が多い。カワラケが一箇所に多く溜まり出土する状態は、宴席で一回使用されるごとに廃棄される非日常的な飲食器の廃棄状況や、経典を墨書きしたカワラケを使った地鎮信仰が考えられる。

555・559・556・558・560～562 は土師皿である。いずれの底部には回転糸切り痕の後に板目痕が残されている。557 は土師質の皿である外面のロクロ調整が顕著にみられる。563 は土師質の鉢である。口縁部上面に穿孔あり、一对になるものである。564 は堺明石の陶器すり鉢である。すり目は 9 条 /2.2cm で施される。565 は京信楽系の陶器甕である。体部外面上に双耳が貼りつけられている。566 は磁



第170図 SX2022遺構図・出土遺物



第171図 SX2025 遺構図・出土遺物

器蓋物である。優品である。567は磁器碗である。外面中央に「南」の文字を巡らせている。568は陶器碗である、外面に草木の文を刻みその上から釉薬を施す。569・570は肥前産の磁器仏飯器である。570は口縁部外面に染付により文様が描かれている。571は磁器小碗である。572は肥前陶器碗である。

#### ⑤ AB区第2遺物包含層・第2遺構面(第176図)

##### 第2遺物包含層出土遺物

576は粘板岩の砥石である。577は銅鏡「寛永通宝」である。578は青銅製煙管の吸口である。肩を設げず口付まで比較的急に細くなる。19世紀の年代である。579は珉平焼の小皿である。580は在地の阿波大谷の徳利である。体部に△で開いた「二」を白釉薬で表す。581は肥前産の磁器皿である。583は土師質の涼炉である。口縁部内上面部にボウラと呼ばれる急須を保持する突起が設けられている。582は関西系の陶器土瓶である。584は堺明石産のすり鉢である。

##### 第2遺構面遺物

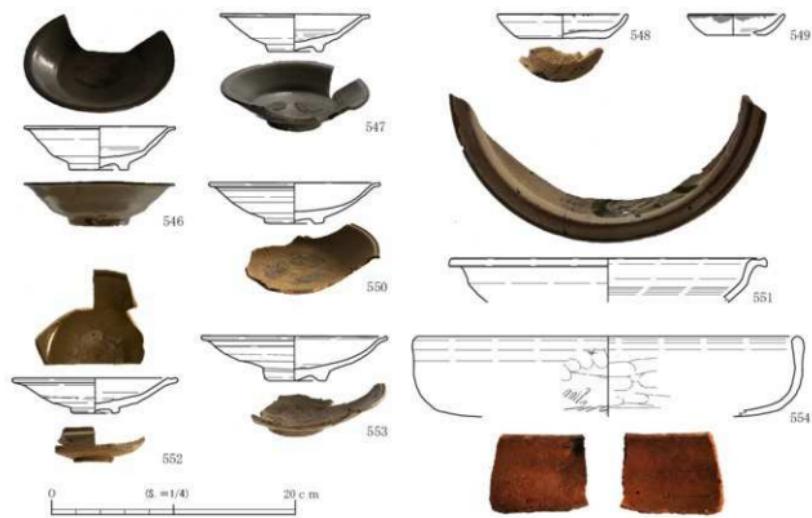
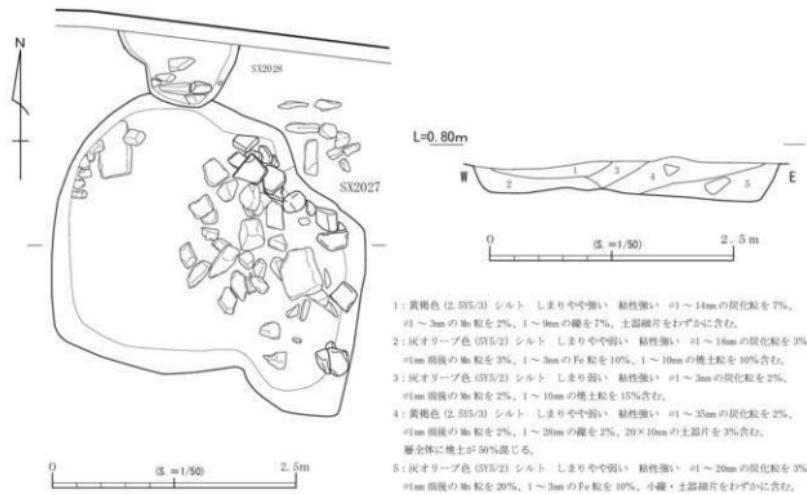
573は肥前産の磁器碗である。574は土師器の羽釜である。575は土師器の焰爐である。

#### ⑥ C区溝 (SD)

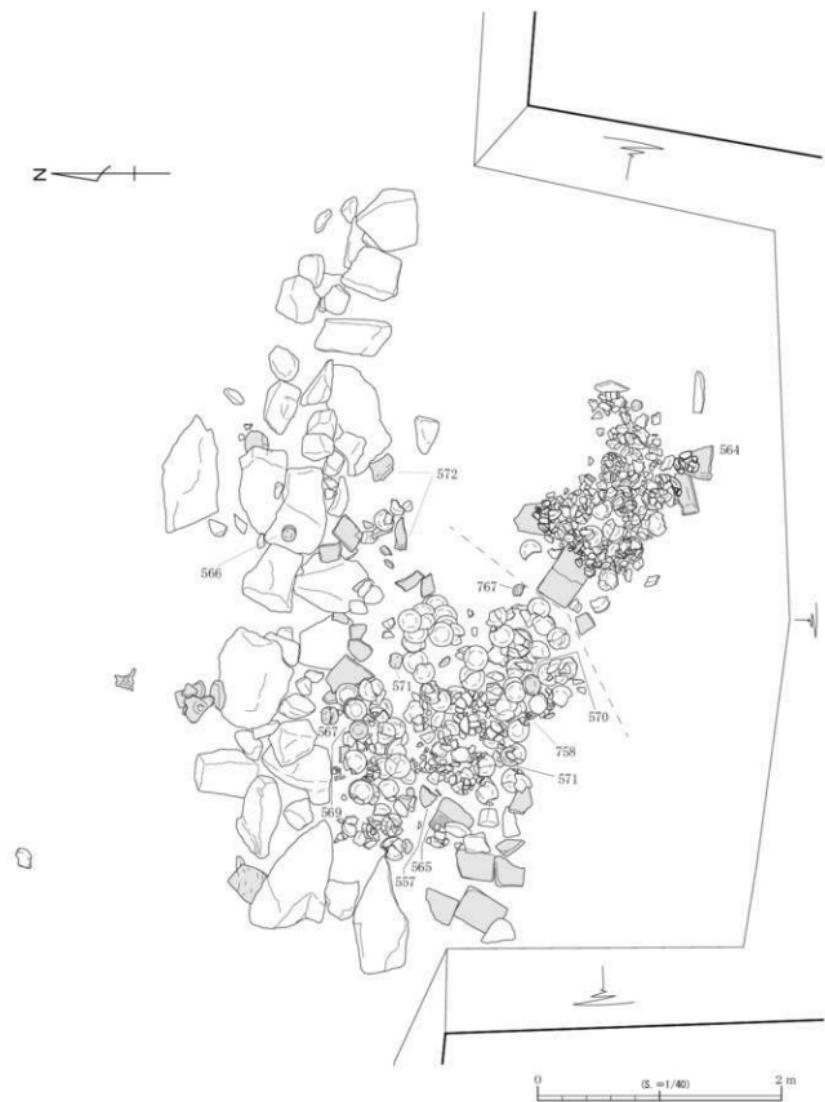
##### C区 SD2001・SD2002・SK2005(第177図)

SD2001の規模は検出長4.8m、幅0.88m、深さ0.12mを測る。調査区の北壁・南壁よりもそれぞれ外へ延びている状況である。585は備前産の陶器の徳利の口縁部片である。

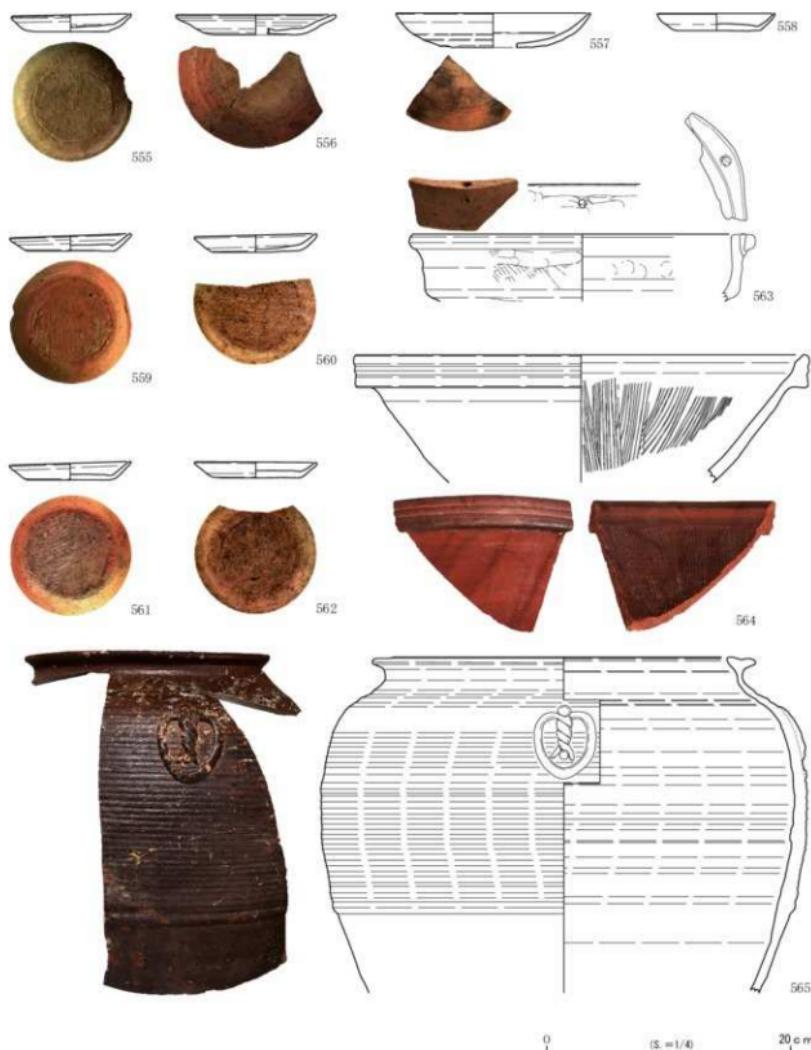
SD2002はSD2002に先行して形成された溝である。その規模は検出長4.8m、検出最大幅1.96m、深さ0.24mを測る。遺構内には石が多数検出された。



第172図 SX2027遺構図・出土遺物



第 173 図 SX2029 遺物出土状況図



第 174 図 SX2029 出土遺物 1



第175図 SX2029出土遺物2

586・587は肥前産の陶器皿である。内面見込みに足付ハマ溶着痕があり、高台は凹形に削り出す。19世紀の年代である。588は肥前産陶器の大形鉢高台部片である。凹形高台である。

#### ⑦ C区土坑 (SK)

##### C区 SK2005

平面楕円形状で、長軸長1.24m、短軸長1.02m、深さ0.2mを測る。SD2002・SK2004の後に形成される。589は京信楽系の碗であり、体部の腰が張る。

#### ⑧ C区柱穴 (SP)

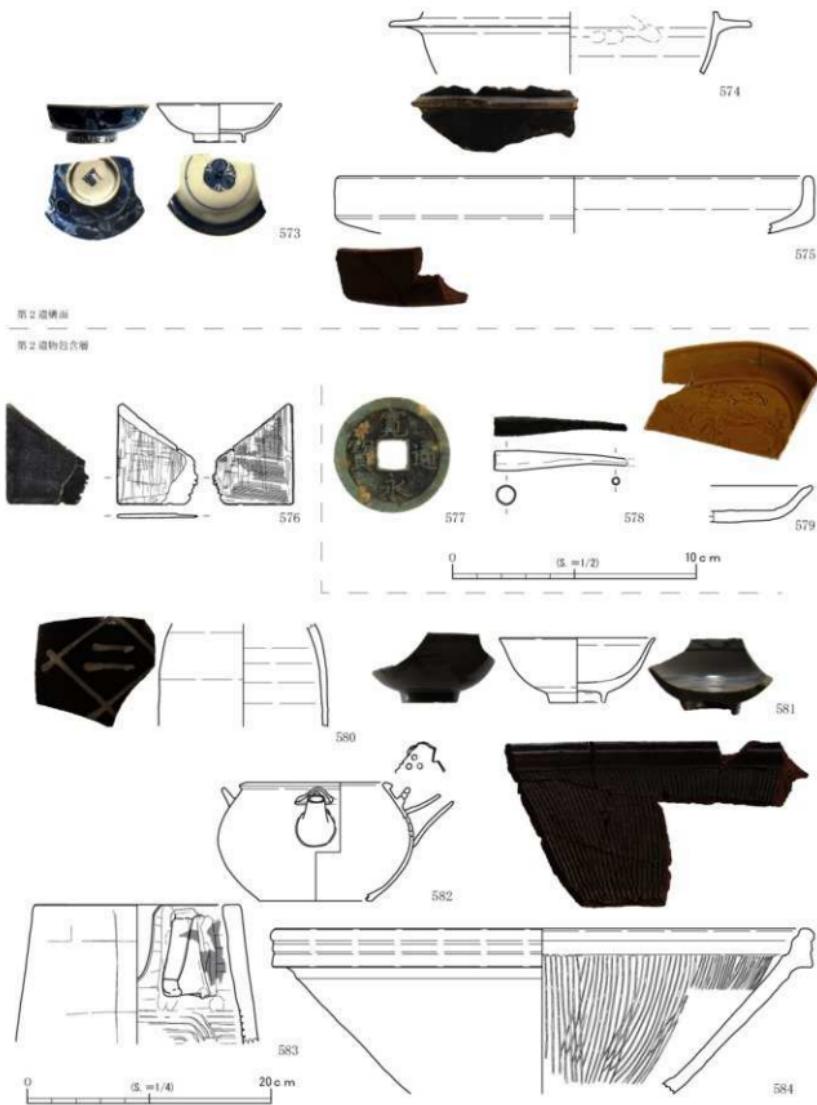
##### C区 SP2012 (第178図)

平面隅丸方形状の柱穴跡である。その規模は長辺0.26m、短辺0.22m、深さ0.26mを測る。また柱穴跡の中央部には平面直徑約0.12mの柱痕跡が認められた。590は磁器皿の高台部片である。

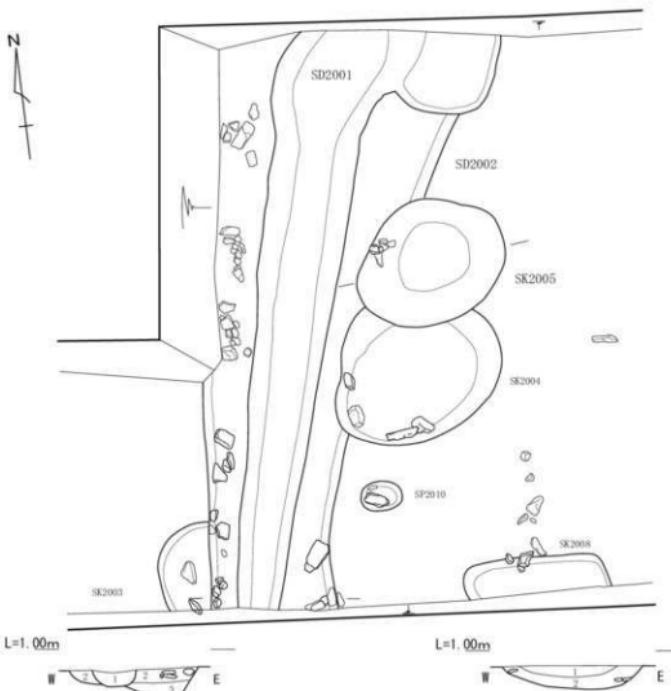
#### ⑨ C区性格不明土坑 (SX)

##### C区 SX2002 (第179図)

平面不整形状の土坑である。その規模は、幅3.18m、検出長1.98m、深さ0.4mを測る。遺構の大きさは、調査区の北壁・南壁よりそれぞれ外へ延びている状況である。SP2008・SP2009が後に形成されている。591・592は土師器の皿である。底部外面に回転糸切り調整を施す。



第176図 第2遺物包含層・第2遺構面出土遺物



SD2001・2002 十層断面図

1: 深オリーブ色 (5Y5/3) 砂質土 しまりやや弱い 粘性強い

$\sigma_1 \sim 4\text{nm}$  の Fe 電極を 5% 含む。 (SD2001)

3: オリーブ褐色 (R04/3) シルト しまりやや弱い、粘性強い

1mm 前後の  $\Delta h$  を 3%, 30 ~ 160nm の範を 90%, 1 ~ 5mm の範を 95% とする。

3: 黄褐色 (E. 5Y5/3) シルト しまりやや弱い 粘性強い  $\phi_2 \sim 10\text{mm}$  の礫化粒を 3%

1mm 前後の Mn 粒を 15%, 18×55mm の Cu を 3% 含む。 (S02002)

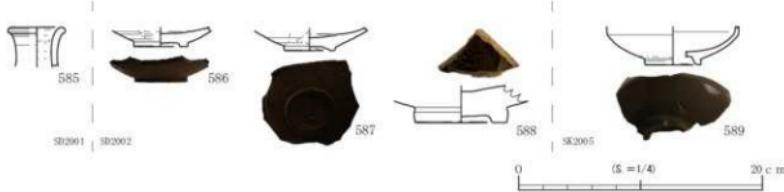
• 第四章 企业战略管理与企业资源管理——企业战略管理

1: 黄褐色 (2.5Y 5/3) 砂質土 しまりやや薄い 粘性やや薄い

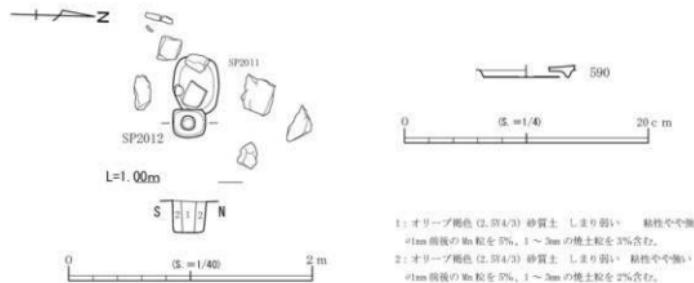
3) 21~3mmの固化範囲を2%, 41mm崩後の曲げ剛性を10%, 2~25

2：オリーブ両色(2.5Y4/3) 砂質土 しまりやや強い、粘性やや強い。

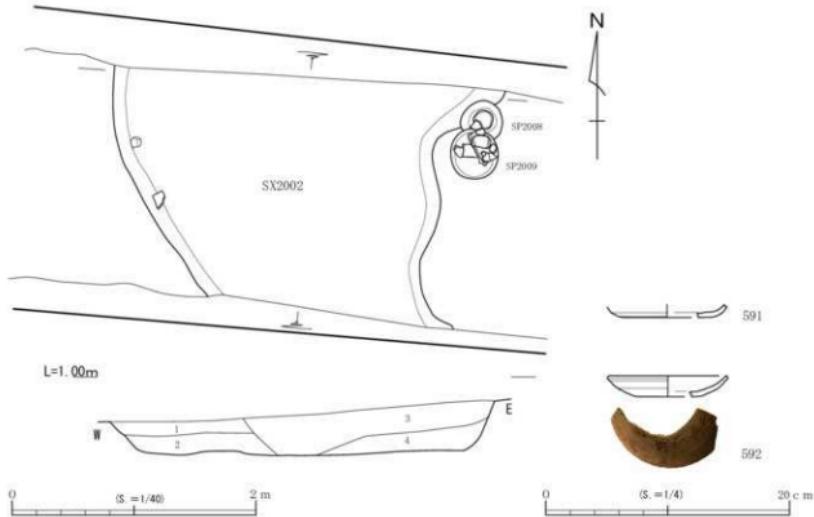
約1mm 前後の Mn 粒を 5%, 2~5mm の粒を 2%, 17×180mm の粒を 5% 含む。



第177図 C区 SD2001・SD2002・SK2005 遺構図・出土遺物



第178図 C区 SP2012 遺構図・出土遺物

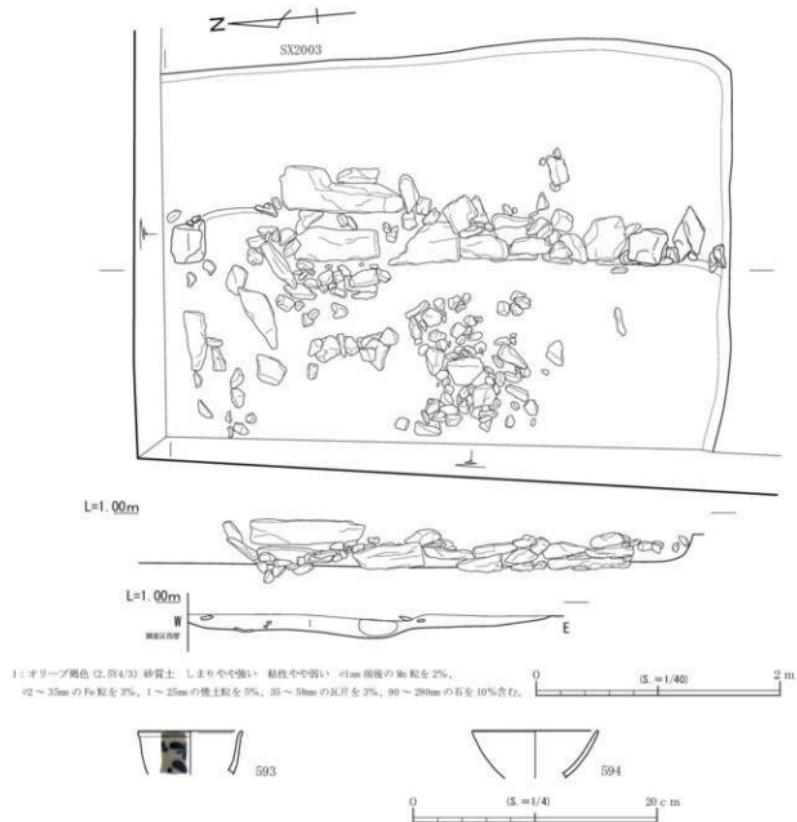


第179図 C区 SX2002 遺構図・出土遺物

### C区 SX2003 (第180図)

遺構規模は、南北検出長 4.66m、東西検出長 3.34m、深さ 0.14m を測る。遺構で石列を検出した。石列は南北方向に並び、西側に面を揃え、長さ 4.58m を測る。石材は形状の長辺が面となるよう並べ、積まれており、その最大長辺は 1m である。そのほか遺構内から石材が多数検出されている。

593 は、磁器碗細片である。瀬戸美濃系の可能性が高い。594 は白磁の碗細片である。



第180図 C区 SX2003 遺構図・出土遺物

#### (4) 第1遺構面

##### ① AB区溝 (SD)

###### SD1009 (第181図)

南北方向に蛇行して延びる溝である。その規模は検出長3.44m、最大幅0.94m、深さ0.12mを測る。遺構内から石材を多数検出した。595は瀬戸美濃産の磁器の碗である。外面は青緑釉を全面に掛け、口縁部は口銷し、内面を四方襷文で巡らせる。19世紀半ばである。596は瀬戸美濃産の陶器火鉢である。深い緑釉が特徴である。

##### ② AB区土坑 (SK)

###### SK1001 (第182図)

平面不整形形状で、南北検出長3.84m、東西最大幅2.26m、深さ0.1mを測る。SX1001・SK1002が後に一部重なって形成される。597は磁器の蓋である。

###### SK1011・SK1012 (第183図)

SK1012は、平面椭円形状の土坑である。その規模は長軸検出長2.16m、短軸長1.46m、深さ0.14mを測る。598は磁器の碗である。口縁部内面に四方襷文を巡らす。599は磁器の碗である。口縁部内面に菊文を貼り付け、口縁部外面上部と内面に灰釉を掛けた。

SK1011は直径約1mの平面椭円形状の土坑である。遺構中央部には、甕が遺構底面に据え置かれて



第181図 SD1009 遺構図・出土遺物

いる状態で出土した。口縁部は欠損していた。600は、磁器の端反碗の口縁部片である。全面に灰釉が掛けられ貫入となる。601は在地阿波大谷の甕である。

#### SK1014 (第184図)

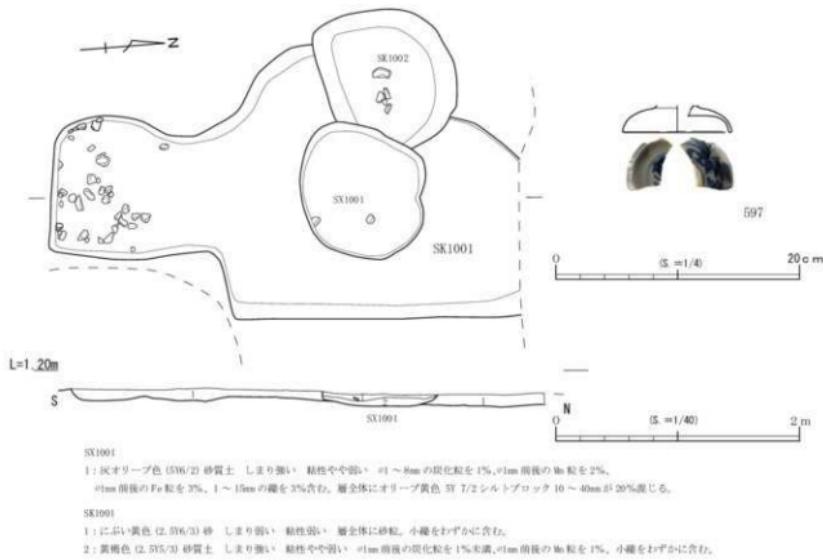
平面橢円形状で、検出長1.54m、幅1.12m、深さ0.18mを測る。SK1015が一部重なり、先行して形成されている。602は土師質の火鉢である。

#### SK1023 (第185図)

遺構北半が搅乱によって失われているが、平面橢円形状と思われる。遺構の規模は南北検出長1.48m、東西最大幅1.98m、深さ0.06mを測る。603は無軸陶器の受付皿である。受け部に「U」字形の切り欠きを施す。

#### SK1024 (第186図)

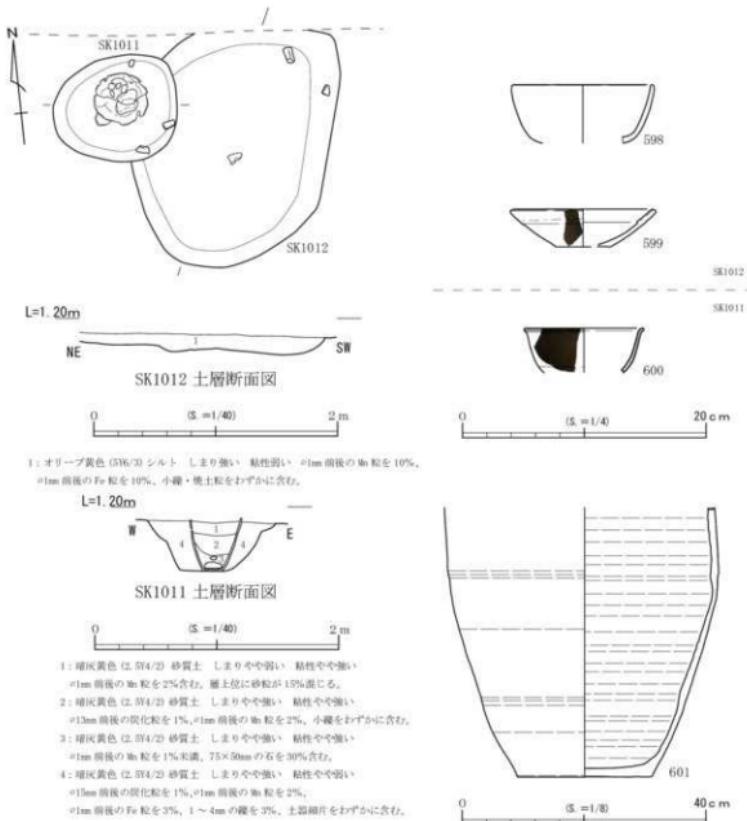
平面直径0.56m、深さ0.26mを測る。遺構内部は底面に甕が据え置かれた状態で出土した。494は磁器の碗である。全面に釉薬を掛け、口唇部に口錫を施す。605は在地阿波大谷の甕である。



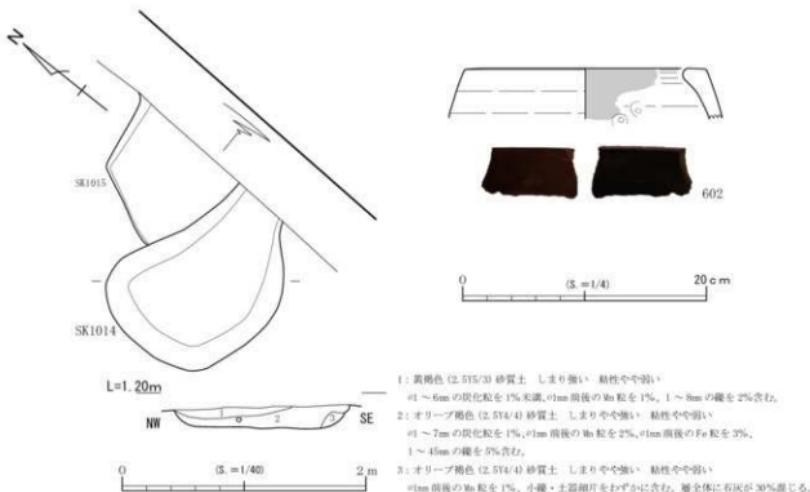
第182図 SK1001 遺構図・出土遺物

### SK1026 (第 187 図)

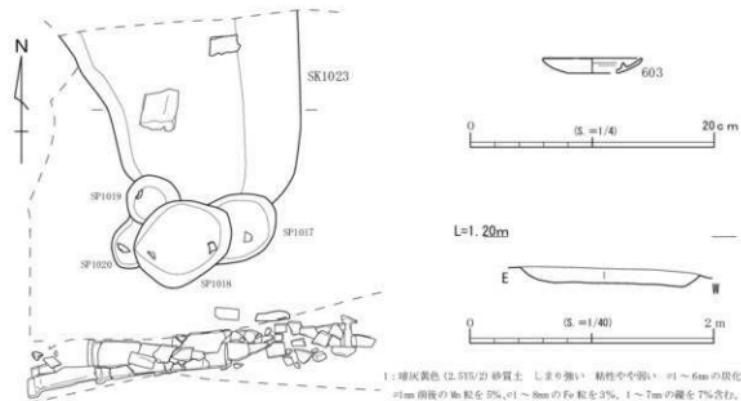
平面橢円形状で長軸 0.8m、短軸 0.58m、深さ 0.18m を測る。606 は京信楽系の陶器小碗である。外面にワラとユズリハの一部が認められ、注連縄文の碗である。



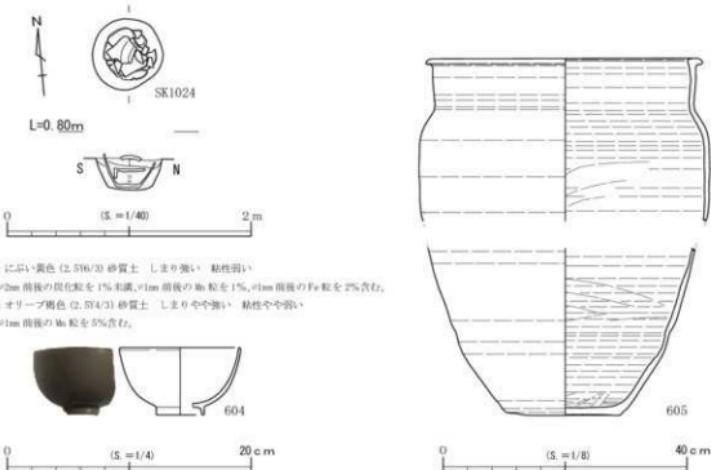
第 183 図 SK1011・SK1012 遺構図・出土遺物



第 184 図 SK1014 遺構図・出土遺物



第 185 図 SK1023 遺構図・出土遺物



第186図 SK1024 遺構図・出土遺物



第187図 SK1026 遺構図・出土遺物

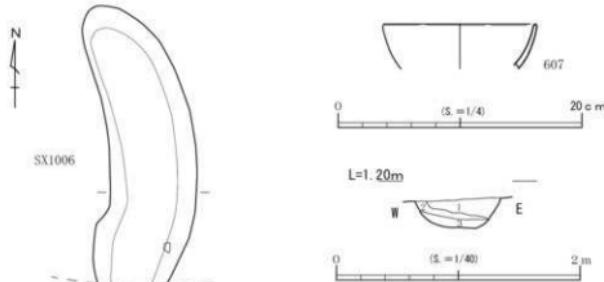
### ③ AB区性格不明土坑 (SX)

#### SX1006 (第188図)

遺構規模は南北検出長 2.32m、幅 0.7m、深さ 0.24m を測る。調査時は土坑としていたが溝である。607 は磁器碗である。外面を青磁釉、内面を口縁部に四方擇文を巡らす。

#### SX1007・SX1008 (第189図)

SX1007 は南北長 1.7m、幅 2.32m、深さ 0.16m を測る。平面形状は不整形である。608 は肥前系の磁器碗である。



1: 雜灰黃色 (2. SW4/2) 砂質土 しまりやや強い 粘性やや弱い <3mm 前後の炭化粒を 1%未満、<1mm 前後の 3n 粒を 3%、1～3mm の繊を 10%、108×45mm の瓦片を 7%含む。  
2: 雜灰黃色 (2. SW5/2) 砂質土 しまりやや強い 粘性弱い <1～5mm の炭化粒を 1%、<1mm 前後の 3n 粒を 5%、小繊をわずかに含む。基全体に 2. SW 6/3 シルトが 30%混じる。  
3: オリーブ褐色 (2. SW4/3) 砂質土 しまりやや弱い 粘性やや強い <1mm 前後の炭化粒を 1%、<1mm 前後の 3n 粒を 2%、小繊をわずかに含む。端に側面に焼土粒が 5%混じる。

第 188 図 SX1006 遺構図・出土遺物

### SX1008

遺構規模は南北検出長 1.32m、東西長 4.36m、深さ 0.14m を測る。平面形状は不整形である。609 は瀬戸美濃系の磁器碗である。610・611 は、石製の硯、裏面も墨を擦り使用している。

### SX1009 (第 190 図)

平面橢円形状の土坑で、東西長 0.96m、南北長 1.24m、深さ 0.04m を測る。612 は肥前系の色絵の磁器碗である。

### SX1012 (第 191 図)

遺構の北半は調査区外の北へ延びているが、平面橢円形状と思われる。その規模は南北検出長 2.5m、幅 2.08m、深さ 0.52m を測る。613 は肥前の磁器小碗である。外面に馬と人、柳文を描き、内面見込みに岩波を染め付ける。614 は京信楽系の陶器小碗である。外面にウラジロとユズリハを描く、注連縄文茶碗である。19 世紀の年代である。615 は陶器の皿である。見込み内面を不整形に釉はぎし、高台は幅広で貼り付ける。616 は肥前系磁器の碗である。19 世紀の年代である。617 は瀬戸美濃系の磁器の輪花皿である。

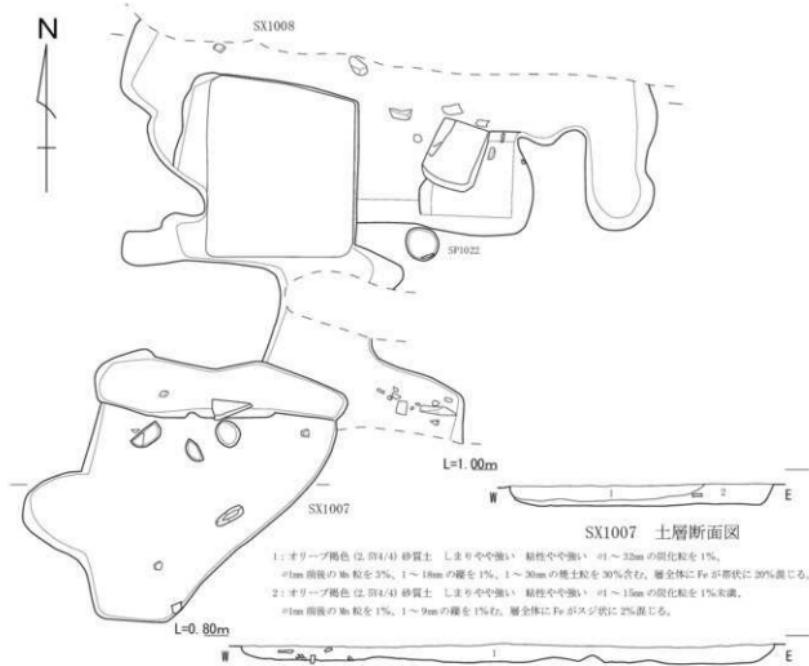
### 第 1 遺構面出土遺物 (第 192 図)

618 は陶器小碗、619 は瓦質土器の香炉である。

#### ④ C 区溝 (SD)

##### C 区 SD1002 (第 193 図)

溝の規模は南北検出長 2.22m、最大幅 1.04m、深さ 0.18m を測る。溝の南北両端部は調査区外へ延びている状況であった。620 は、磁器の端反皿である。



第189図 SX1007・SX1008遺構図・出土遺物



第 190 図 SX1009 遺構図・出土遺物

## ⑤ C 区土坑 (SK)

### C 区 SK1004 (第 194 図)

平面不整椭円形状の土坑で、その規模は長軸長 0.77m、短軸長 0.37m、深さ 0.11m を測る。遺構内から石材を検出した。621 は磁器碗の高台部片である。

## ⑥ C 区性格不明土坑 (SX)

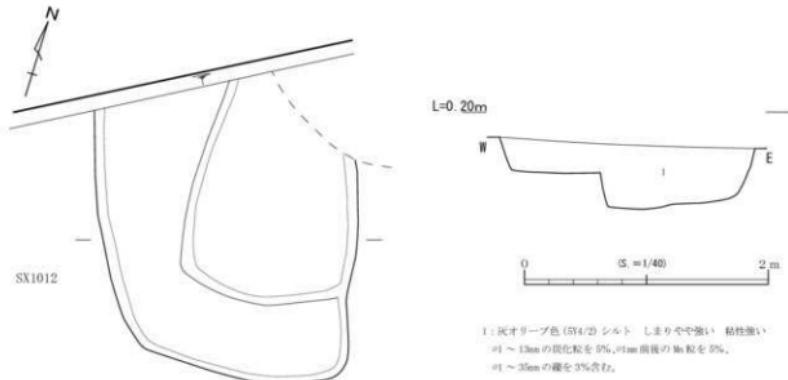
### C 区 SX1002・SX1003・SX1004 (第 195 図)

SX1002 は調査区西端部にあり、検出長 5.08m、検出幅 0.88m、深さ 0.28m を測る。遺構内からは石列を検出した。石列は、遺構の中央部で長さ約 1.42m にいたる 3 基で面を揃えているにすぎず、遺構内全体でみると検出した石群は列をなしていない。また遺構東端部の石は約  $0.76 \times 0.88$ m の平面椭円形状で、厚み 0.46m を測る。その上面中央部には方形状一辺約 6cm、深さ 3cm のホゾ穴を有していた。またホゾ穴を中心とした直径約 22 ~ 26cm の橢円形状の摩耗痕跡を確認した。この石材は礎石と考えられる。

### C 区 SX1003 (第 196 図)

SX1003 は南北検出長 4.64m、最大幅 4.2m、深さ 0.21m を測る。平面形状は大規模な溝状であり、調査区外の南と北へそれぞれ延びている状況である。遺構内には石材が密集して検出された。石材をみていくと、石列となっているところが 5箇所確認できた。それは遺構掘形両端に並ぶようにある西側石列と東側石列 2 とその間の東側石列 1、そして遺構に直交するように並ぶ南端部の南側石列があり、遺構北端部に遺構に直交するように並ぶ北側石列である。

遺構西端部で南北方向に並ぶ西側石列がある。(第 197 図 1) この石列の長さは 4.68m 以上となる。石列の石は一辺が 5 ~ 6cm の石が多数集まって、その上に一辺 0.6 ~ 0.8m の石材を置いていた。このように置かれた石が 3 基あり並んでいた。またその南隣には一辺 0.4m の石材を 3 基ならべていた。この合計 6 基の大きな石は平面直線的に西側に面を揃えて並んでいる状態であった。加えて石列は標高 1.00m を超えるほぼ同じ位置でも並んでいた。



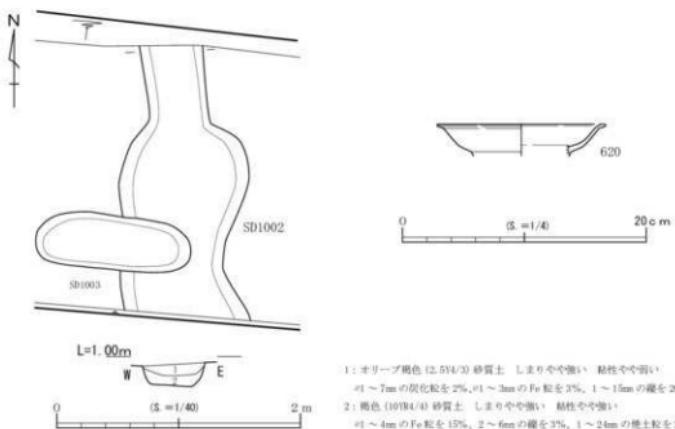
第 191 図 SX1012 遺構図・出土遺物

この遺構西端部の石列にあって、石列南端部にある石は、若干他とまとまりを欠いている。この石材は幅 0.52m、長さ 0.42m 以上の規模を測り、石の上部に平坦面を作り出している。そこには直径 0.16 の摩耗痕跡が認められた。この石の標高は他と一段下がる位置である。石列でこの一基は礎石として利用されたと考えられる。

この礎石から東へ延びる南側石列（第 197 図 2）は、ほぼ標高 1.00m を石列の頂点とし、北に面を揃えて並んでいる状況であった。石材の大きさは一辺 0.6m や一辺 0.3m など大小ある。この南側石列

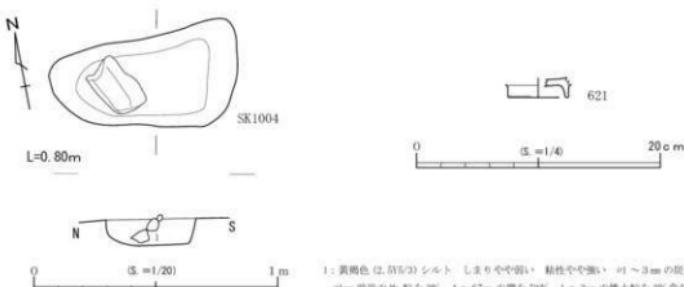


第192図 第1遺構面出土遺物

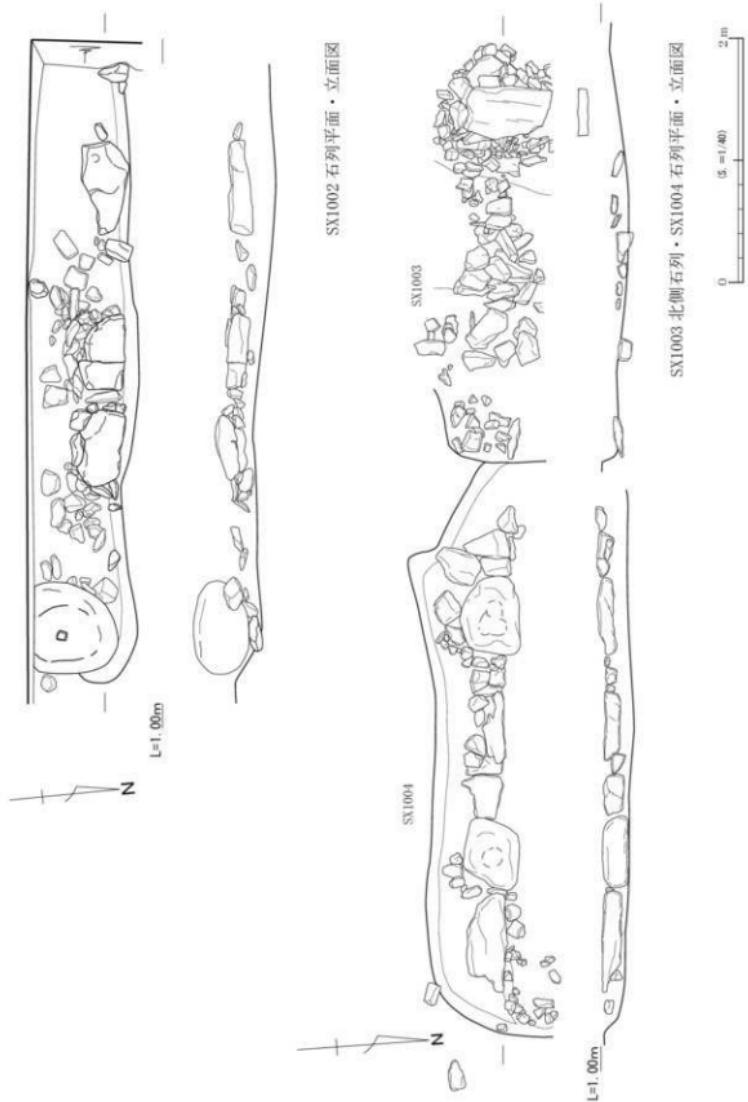


第193図 C区SD1002 遺構図・出土遺物

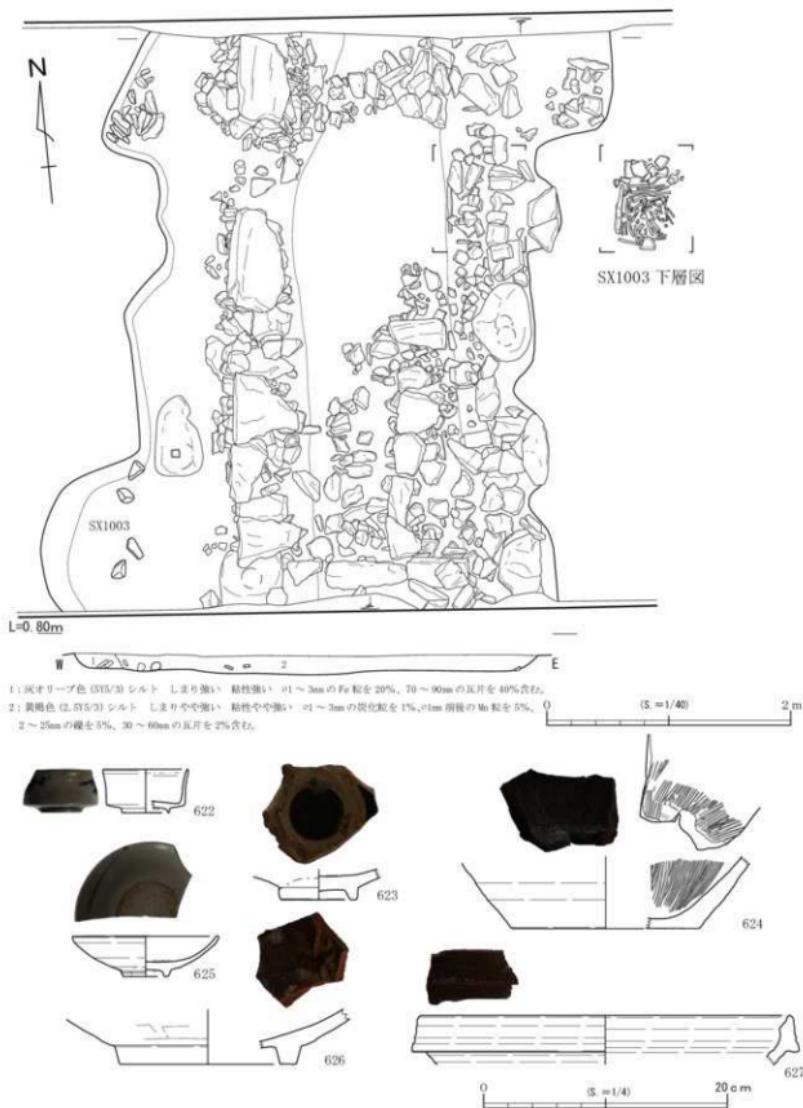
1: オリーブ褐色 (2.5V4/3) 砂質土 しまりやや強い、粘性やや弱い。  
a: ~7mmの炭化粒を2%、1~3mmのFe鉢を3%、1~15mmの縦を20%含む。  
2: 黄褐色 (10YR4/4) 砂質土 しまりやや強い、粘性やや強い。  
a: ~4mmのFe鉢を15%、2~6mmの縦を3%、1~24mmの焼土粒を25%含む。



第194図 C区SK1004 遺構図・出土遺物



第195図 C区 SX1002・SX1003・SX1004 石列平面・立面図



第196図 C区 SX1003遺構図・出土遺物

は西側石列と東側石列2に挟まれるようにある。

東側石列1(第197図3)は南側石列の北の位置で南北方向に並んでいる。その長さは約2mである。この石列は一辺10cmほどの多数の石の上に一辺0.4mの比較的大きな石材を並べる状況である。北端部の位置に大きな石材が一基抜け落ちているようにみえる。この東側石列1と南側石列は、他の石列の間に挟まれるようにあり、その用途が不明である。しかし標高は1.00mを石列の頂点としており、南側の石列と高さを揃えていることから一連の役割があったことが窺える。

東側石列2(第197図4)は一辺約20cmの石材が南北方向に並びその間や後ろに、一辺0.6mを測る石材3基が置かれている状況であった。大きな石材の北側の石は、上部に平坦面を作り出し、一部に摩耗痕跡が認められた。摩耗部分は直径0.16mの範囲とその範囲に一部重なるようある直径0.16mと推定する範囲があった。いずれも柱を据え置いた痕跡と思われ、この石材は礎石の役割を果たしていたと考えられる。そして礎石の上には、摩耗痕跡が一部重なって認められたことから、柱の建替えが窺われる。

北側石列は、先にみた西側石列の北端部の石をまたいで東西に延びている。面を揃えるなど石列としてのまとまりに欠けるところがあるものの、その長さは4.2mまで延びていることがわかる。北端部の石と比べて、標高が1.00m以下と低い位置にあることから、西側石列よりも先行して形成されていたことがわかる。

その他、東側石列2の北端部の下層から、大量の瓦片が出土した。瓦片は全体で方形状に集め、縦方向に据え置いている状況であったが、遺構掘形に納まるような出土状況ではなかった。

そして、西側石列の西側に、礎石を検出した。この礎石の上面には一辺6cmの方形状、深さ3cmのホゾ穴を有し、このホゾ穴を中心に一辺約0.22mを測る梢円形状の摩耗痕跡が認められた。

622は磁器の筒形碗である。623・625は陶器の皿である。626は陶器の鉢、624・627は陶器のすり鉢である。

#### SX1004

石列を検出した土坑である。その遺構規模は、検出長4.7m、検出幅1.0m、深さ0.2mを測る。石列は最大一辺0.64mの石材から最小一辺10cmほどの石材を使って東西方向に延びており、西に延ばすと、先述したSX1003の北側石列と直線的に縦に並ぶような位置である。SX1003北側石列とSX1004の石列の関連性については不明である。

SX1004の石列には比較的大きな石材があるが、そのうち2基の上面は平坦面が作られており、直径0.16mを測る摩耗痕跡が認められた。柱を据え置いた痕跡である。1基にはこの柱の位置を変えたかのように、摩耗痕跡が一部重なりながら、3箇所認められた。柱の建替えが窺われる。

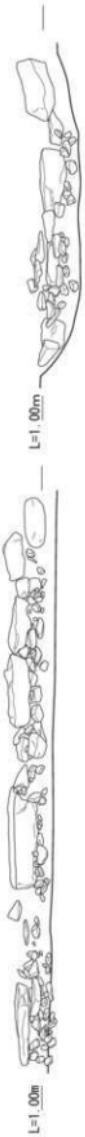
#### 調査区出土遺物(第198図)

628は注連縄文碗でエビが描かれる。629・630は硯、631は礎石、632は大谷焼の壺、633は土管である。

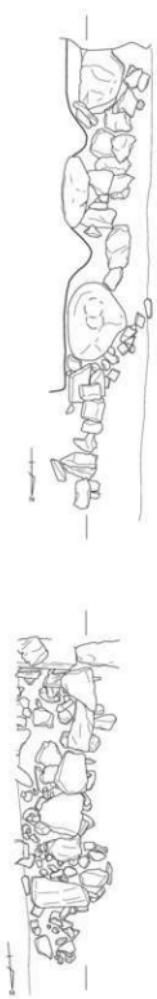


第197図 C区 SX1003 石列平面・立面図

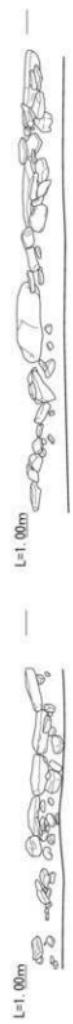
1. SX1003 西側石列平面・立面図



2. SX1003 南側石列平面・立面図

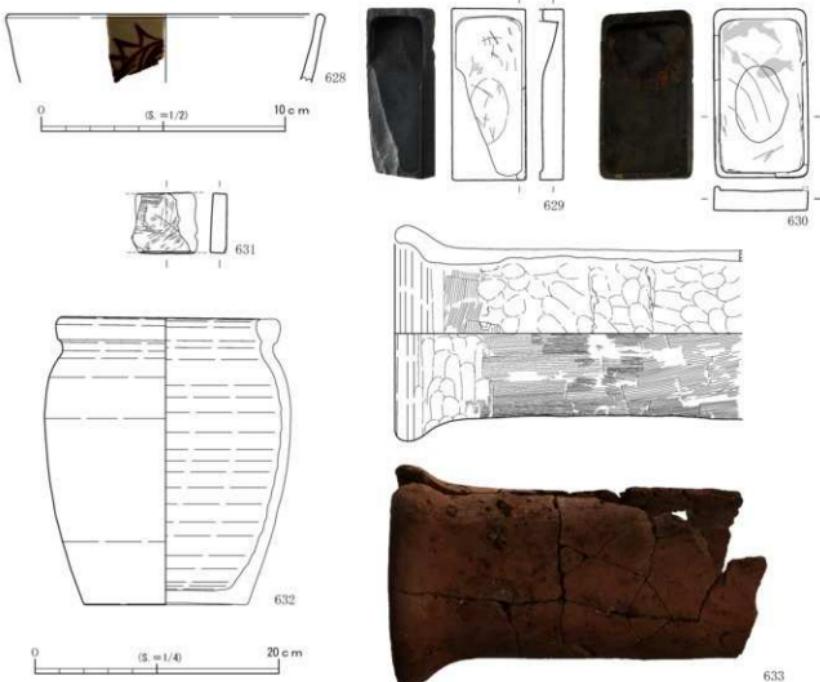


3. SX1003 東側石列 1 平面・立面図



4. SX1003 東側石列 2 平面・立面図

(S. = 1/40) 2 m



第 198 図 調査区出土遺物

## (5) 遺物

### ① 墨書き土器（第199・第200図）

墨書き土器は表1の通り当該遺跡から出土した。そのうち写真ならびに実測図を12点掲載する。634はAB区第3遺物包含層から出土した在地阿波大谷の陶器裏底部片である。底部外面に「上六」と楷書で墨書きする。635は瀬戸美濃産の陶器練鉢の底部片である。AB区SX2016から出土した。底部外面高台見込みに「文政四・・」と墨書きする。この練鉢の使用年代は、文政4年は1821年となる。底部の墨書き文字の不明があることを考慮して、少なくとも文政年間は1818～1831年であるため、その年代は19世紀前半となる。他の遺構や土器年代から考える第2遺構面の年代と矛盾しない。636はAB区SX1012から出土した瀬戸美濃系の鉢である。底部外面に「庄」と大きく一字のみ墨書きする。名東郡庄村を意味する可能性がある。637はSX4035から出土した陶器すり鉢である。SX4035は出土する他の遺物が19世紀前半であることから、本来第2遺構面の遺構と考えられる。このすり鉢底部外面に「〇〇子」とある。また体部外面下端に「久喜」と逆さに刻印がある。内底面の放射線状の擦り目が入るもの、「久喜」の刻印のあるものは明石産の可能性が高い。638はSK3001から出土した瀬戸美濃産の陶器練鉢である。底部外面に、山を「く」の字で表し「万」の上に被せたような墨書きがある。山万講と呼ばれる山岳信仰のうちの富士講の一つを表している可能性が高い。体部外面には横向きで「宕」を墨書きする。639は陶器の香炉底部である。底部が三足となり、側面に不明ながら墨書きされる。640はSX3010出土である。陶器碗の高台見込みに記号のような墨書きがあり、641は第3遺物包含層から出土した。陶器裏の体部下端部片である。体部側面に不明の墨書きがある。642・643は第4遺物包含層から出土した。642は陶器皿である。底部外面に不明の墨書き「・・」がある。643は瀬戸美濃産の練鉢の底部片である。底部外面に「御・」と墨書きする。644はSP4135から出土した。陶器の大形鉢である。底部外面見込みに「・・」墨書きがある。645はSX2016から出土した瀬戸美濃産の陶器練鉢である。底部外面に638と同じように山を「く」の字で表し「万」の上に被せたような墨書きがある。山万講と呼ばれる山岳信仰のうちの富士講の一つを表している可能性が高い。体部外面には横向きで「・・」墨書きする。

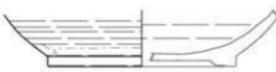
### ② 瓦

瓦は第4遺構面から第1遺構面までの遺構、また遺物包含層や攢乱で出土した。当該遺跡出土の平瓦や丸瓦の個数を把握する代わりに、出土した分の重量を計測した。そして当該遺跡出土の平瓦完形の重さは2,180g、丸瓦完形の重さは約1,570gであったため、これを基にした。出土平瓦は、第1遺構面出土の重さ130.6kgから約60個分、第2遺構面出土の重さ1723.1kgから約790個分、第3遺構面出土の重さ724.5kgから約332個分、第4遺構面出土の重さ201.8kgから約93個分、第1遺物包含層出土の重さ49.4kgから約23個分、第2遺物包含層出土の重さ412kgから約19個分、第3遺物包含層出土の重さ154.1kgから約71個分、第4遺物包含層出土の重さ164.7kgから約76個分、攢乱出土の重さ670.5kgから約307個分である。

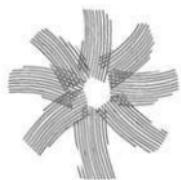
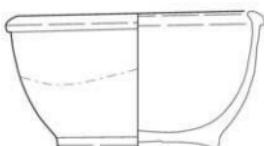
出土丸瓦は第1遺構面出土の重さ32.9kgから約21個分、第2遺構面出土の重さ386.7kgから約246個分、第3遺構面出土の重さ227.2kgから約145個分、第4遺構面出土の重さ60.4kgから約38個分、第1遺物包含層出土の重さ15.1kgから約10個分、第2遺物包含層出土の重さ94kgから約60個分、第3遺物包含層出土の重さ60.3kgから約38個分、第4遺物包含層出土の重さ64.7kgから約41個分、



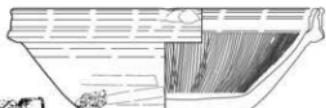
634



635



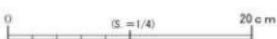
636



637



638



0

(S. = 1/4)

20 cm

第 199 図 出土墨書土器 1



639



640



641



642



643



644



645



0 20 cm  
(S. = 1/4)

第 200 図 出土墨書土器 2

攪乱出土の重さ 112.3kgから約 72 個分であった。

当時の瓦を葺いた使用個数は不明であるが、出土した瓦の重さから推定した個数は、断然少ないようと思われる。また、平瓦・丸瓦の出土個数から比較して第 2 遺構面・第 2 包含層出土数が圧倒していた。軒平瓦・軒丸瓦の出土数も第 2 遺構面・第 2 遺物包含層出土個数が多い。そのため、当該遺跡では第 2 遺構面の年代である 19 世紀前半に最も多く使用し瓦を葺いていたことが窺える。

### 軒丸瓦

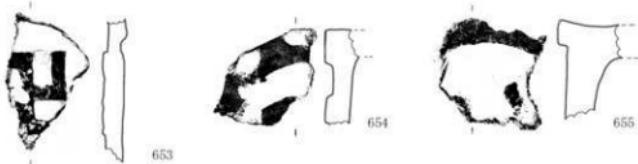
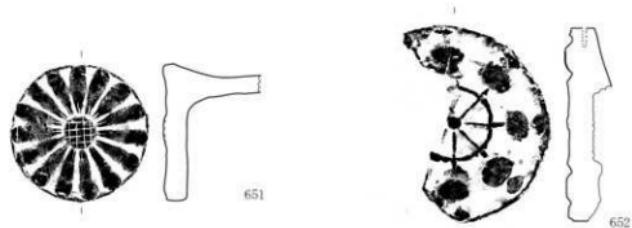
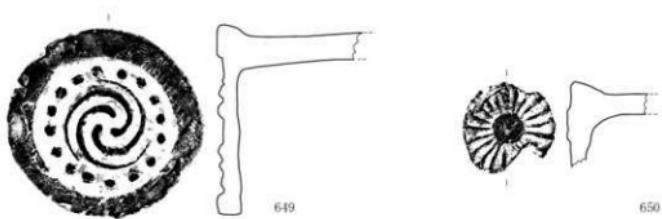
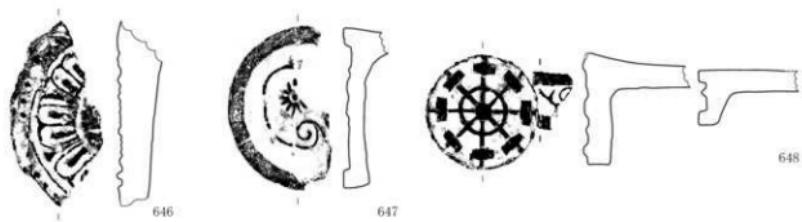
当該調査地から軒丸瓦（第 201 図）が出土した。646 は SX3009 から出土した。文様は蓮華文で、八葉二弁連結葉文である。石井廃寺出土軒丸瓦と近似しており、同范と確定できていないが、すくなくとも同型の瓦である。647 は SX3002 から出土した。橋と唐草の模様である。橋は花を上から見た図柄であろう。648 は SD2004 出土の軒棟瓦である。出土が稀な水車文である。649 は SX3009 出土である。巴が長い左巴文である。当該遺跡出土の巴文軒丸瓦は軒棟瓦を含め合計 288 点が出土した。649 の軒丸瓦は古い型式である。

650 は SX3018 出土である。瓦当直径が小さく、菊文の隅瓦と考えられる。651 は SD2004 出土である。瓦当の直径が小さく菊文の隅瓦である。652 は SD2004 出土である。652 は 648 と似た水車の瓦当文様である。鳥衾である。653～655 は卍文の軒丸瓦である。653・655 の文様の幅は狭く、654 の文様の幅が大きい。卍文は年代が新しくなると卍の線の幅が大きくなる傾向がある。

※出土した蓮華文軒丸瓦と石井廃寺出土の蓮華文軒丸瓦が同型であることは、早渕隆人氏から御教示を受けた。

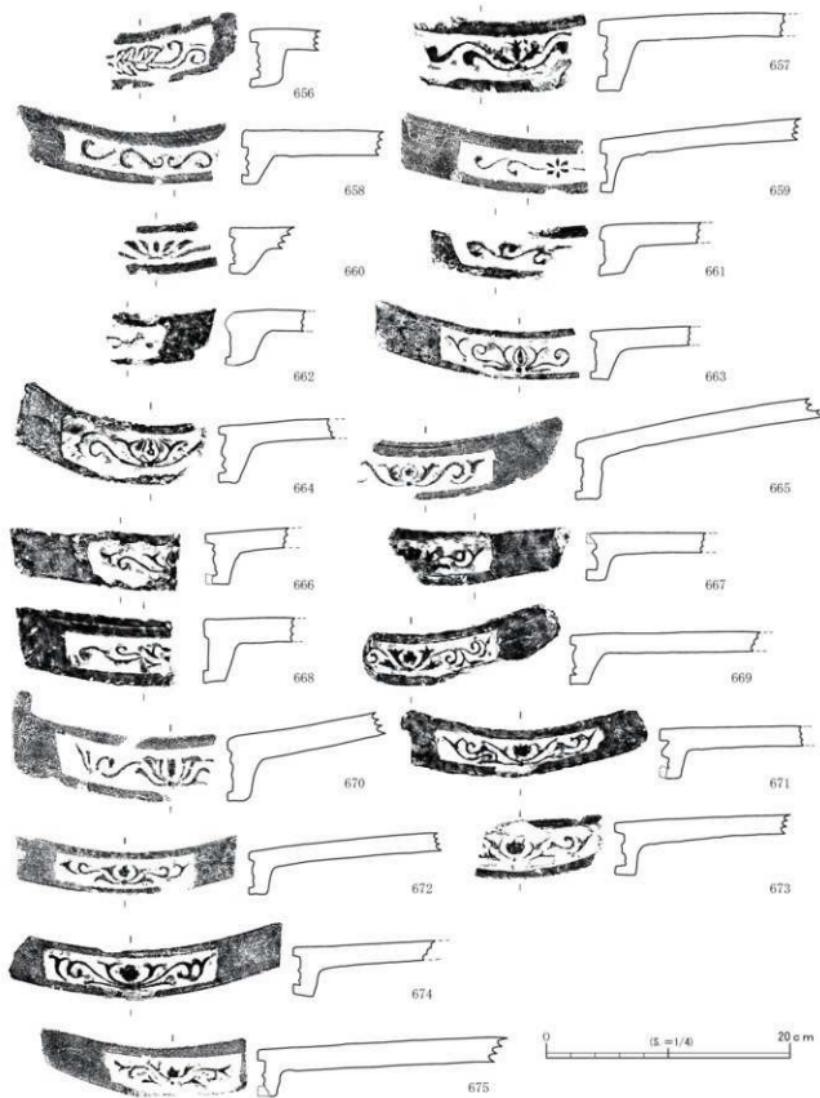
### 軒平瓦

当該調査地から軒平瓦（第 202 図）は 209 点出土した。その多くは第 2 遺構面の遺構から出土している。概観すると、656・657 は第 4 包含層、658・659 は SX3014 出土であり、660～674 は第 2 遺構面の各遺構出土、675 は SX1003 から出土した。第 4 遺構面の遺構からは SX4035 と SX4020 から各 1 点が出土した。SX4035 は第 2 遺構面の年代であり、SX4020 出土品は細片で瓦当面が不明であった。656 は、葉脈 4 葉と唐草文をもつ軒平瓦である。葉脈を 2～4 葉をもつ瓦は第 3 遺構面の遺構から出土する傾向にある。他の城下町跡調査では、橋の軒丸瓦が出土していて、そこには葉脈のある葉文を配している。656 の葉脈 4 葉は橋の葉であろう。657 は第 4 遺物包含層出土である。橋と均等唐草文をもつ軒平瓦である。橋の離しへと雄しへをより実写に近く描くのが特徴である。658 は均等唐草文をもつ軒平瓦である。中心に花をもたない。この瓦も第 3 遺構面の年代（17 世紀～18 世紀）の遺構から多く出土する傾向にある。659 は 6 葉と均等唐草の文をもつ軒平瓦である。647 の軒丸瓦の文と装飾が似ており、659 と一緒にものと推定する。瓦当文の中心は橋を上からみた図柄であろう。660 は破片であるが瓦当面に橋文をもっている。橋を横からみた花弁の広がりを描いている。661～675 の軒平瓦は瓦当面の中心に横からみた橋をえがき、左右に均等の唐草文を配する。その文様を仔細に検討すると、個々に様々な文様を配している。そのため、唐草の数や巻く方向や上下の違いなどで大きく便利的に 9 種類に分けることができる。傾向としては、第 2 遺構面から第 1 遺構面の年代（19 世紀）の軒平瓦の文様は、橋を横からみたものを中心に、左右に均等の唐草文を配する図柄と捉えることができる。



0 (5 = 1/4) 20 cm

第201図 出土軒丸瓦・隅瓦



第202図 出土軒平瓦

## 稻追二束文軒丸瓦

稻追二束文軒丸瓦（第 203～205 図）を分類した。当該調査区から出土したすべてを表にした。蜂須賀家の紋は「冂」がよく知られているが、他に「稻丸」「桐」「抱柏」と呼ばれる替紋がある。当該調査地は藩の米蔵ならびに森甚太夫家の敷地部分にあたるが、ここから「二つ稻追い文」と呼ばれる文様が施された軒丸瓦が出土している。これは替紋の「稻丸」にあたる。替紋は藩主の使用の他に、分家や重臣に与えられることが、「藩法集 243」に規定が記されている。

軒丸瓦の稻追い二束文様は、稲穂を束ね、丸形に二束が追うように配した文様である。束ねた先は穂 1 本と、葉かあるいは茎 4 本を弧状にして広げ配した表現となっている。そして束ねた後ろの茎数本は、鋭角をもつ四角形、長方形や三角形の图形を使って組み合わせ、束ねた茎の先が広がる様子を表現している。一本の稲には、穂を 15 粒つけているが、この稲穂の主軸部分に 4 粒、右分枝部分に 5 粒、左分枝部分に 6 粒を配している。瓦当の縁の形状は、軒丸瓦は断面三角形、軒棟瓦の軒丸部分は断面方形である。

この文様をもつ瓦は第 2 遺構面 SD2003・SD2004・SD2007 から多く出土した。これらは、屋敷地を区画する境につくられた南北方向に直線的に延びる溝跡である。第 4 遺物包含層および第 3 遺構面の遺構でも出土しているが、この瓦は第 2 遺構面の年代（19 世紀前半）を中心に使用されたことが窺える。

この稻追い二束文様の瓦を詳細にみると瓦によって図柄が多少異なっている点が認められる。それは稲穂の主軸部分の 4 粒の穂の形状がすべて、水滴のような橢円形状の表現のものと、その 4 粒の穂の 3 粒までが一部重なり合う表現のものとがある。また主軸の穂は稲と繋がっているものと、それらが離れているものがある。この稲穂の文様の形状を確認すると、穂が重なり合うものは范の型押しがずれて二度押ししされたことによるものではなく、また穂と茎の接続の有無は、范の型押しの力加減によって生じるものではない。重なり合う穂の文様には、他の部位でも二度押ししされた形跡はなく、はっきりと型押しされたものでも離れているものが認められた。このほか、稲を束ねた部分を凸線 4 条で横に並べて表現しているものがほとんどであるが、中にはこれを 5 条で横に並べるものがあった。また束ねた後ろの茎の图形による表現は、鋭角をもつ四角形 1 つ、長方形 3 つと三角形大小各 1 つを組み合わせているものが多いが、長方形を 3 つから 4 つに増やしているものや、長方形 1 つと三角形小 1 つに変わつて鋭角をもつ四角形小 1 つにしているもの、茎の端部に L 字状の表現が足されているものがあった。

つまり、この稻追い文は同じ図柄を表現しているが、細部の違いが認められる。これらの違いの組み合わせなどから大きく 4 つに分類することができた。この分類は、軒棟瓦の軒丸分の稻追い文様にも該当する。

分類は穂の 2 種類の形状と穂と稲の繋がりの有無によって 4 通りの組み合わせの可能性が想定できる。また 3 類と 4 類の軒棟瓦では、束の後ろの茎の图形が長方形を 4 つとして表現していた。

676・677・684・685 の稻追二束文は、穂が丸く、穂と茎が繋がっている。これを 1 類とした。この 1 類を大小によって、軒丸瓦の規模を 1-A 類、軒棟瓦の規模を 1-B 類とした。次の 2 類が 1 類と異なる点は、穂と茎が離れていることである。穂は丸い。686・687・688 の稻追二束文が 2 類に当たる。この 2 類を大小によって分けられる。軒棟瓦の規模を 2-B 類とした。軒丸瓦の規模とする 2-A 類は、当該調査地から出土しなかったが、他の城下町跡調査地からなど存在する可能性が高いため設定しておく。

次に穂と茎が繋がっていて、穂が重なり合う表現によって、穂の下部が瘤む形となるものを 3 類とした。678・679・680・689・690 が当たる。この 3 類を大中小によって、軒丸瓦の規模を 3-A 類、軒棟瓦の規模を 3-B 類とした。そして中の規模を 3-C 類とした。3-C 類は隅瓦である。



676

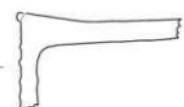


677

1-A類



678



679

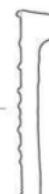
3-A類



680



681



682

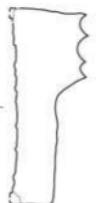


683

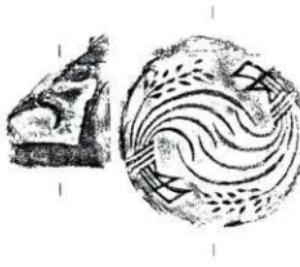
4-A類



第203図 稲追二束文軒丸瓦分類図1

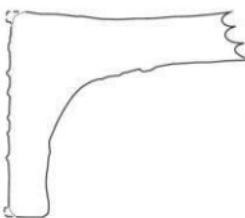
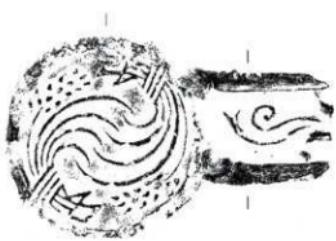


684

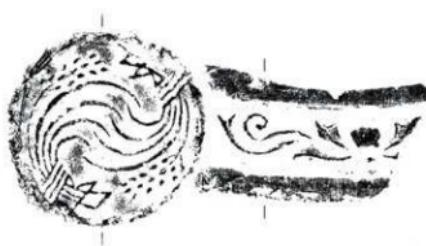


685

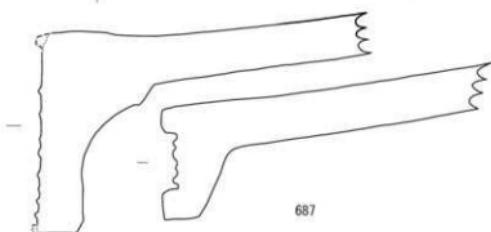
1-B類



686

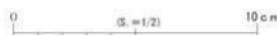


688

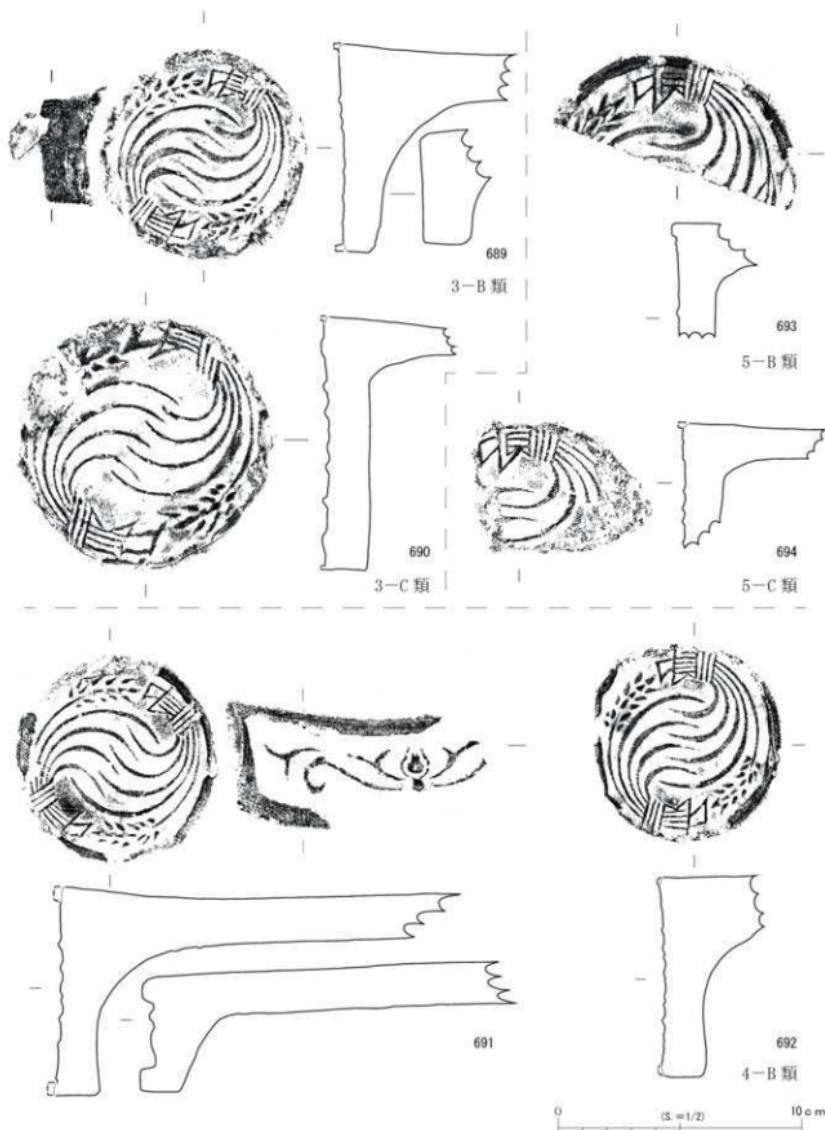


687

2-B類



第 204 図 稲追二束文軒丸瓦分類図 2



第 205 図 稲追二束文軒丸瓦分類図 3

また、3-B類とした689は、穂を束ねた後ろの茎の图形が長方形を4つとしている。そのため鋭角をもつ四角形が長方形4つに取りつく位置が1類・2類・3-A類・3-C類と比べ、3-B類は、他と異なる位置となり異なっていた。

次の4類が3類と異なる点は、穂と穂が離れていることである。穂は、重なり合う表現によって、穂の下部が窪む形となるものを4類とした。681・682・683・691・692は4類である。この4類を大小によって、軒丸瓦の規模を4-A類、軒棟瓦の規模を4-B類とした。4-B類の稲穂を束ねた後ろの茎の图形表現は、3-B類と同様に長方形を4つとし、鋭角をもつ四角形の取りつく位置が、長方形4つ並んだ真ん中2つに取りついでいる。

これまでみてきたように稻追二東文瓦の分類指針は稲穂の2種の形状と、その繋がりの有無によって判断し、規模の大小で細分してきた。そのため以下に設定した5類については、本来は先の4つの分類に含まれる細分類として設定することが分類指針に合致する。しかしながら、5類は、特徴的であるが遺存状態がよくないために新たに設定した。5類の特徴は、束を5条の凸線で表現し、茎の稲穂の茎の端部にL字状の表現が足されているものである。693は軒棟瓦の規模であるため5-B類とし、694は隅瓦であるため5-C類とした。

まとめる以下のようにある。

- |                                |  |
|--------------------------------|--|
| 1類 穂が丸く、穂と茎が繋がっている。            | - A類：軒丸瓦、- B類：軒棟瓦の軒丸部分                                 |
| 2類 穂が丸く、穂と茎が離れている。             | - A類：軒丸瓦、- B類：軒棟瓦の軒丸部分                                 |
| 3類 穂が3粒重なり合い、穂と茎が繋がっている。       | - A類：軒丸瓦 長方形3つ<br>- B類：軒棟瓦の軒丸部分 長方形4つ<br>- C類：隅瓦 長方形3つ |
| 4類 穂が3粒重なり合い、穂と茎が離れている         | - A類：軒丸瓦 長方形3つ<br>- B類：軒棟瓦の軒丸部分 長方形4つ                  |
| 5類 束を5条の凸線で表現し、L字状の凸線が足されているもの | - B類：軒棟瓦の軒丸部分<br>- C類：隅瓦                               |

### 刻印瓦

徳島城下町跡徳島町1丁目地点からは多くの瓦が出土したが、そのうち刻印が施された瓦が46点確認できた（第206・第207-1・第207-2図）。刻印が施された瓦には、「池谷」「山内」「阿万」「谷川」と地名が読み取れる。「池谷」「山内」は鳴門市大麻町池谷ならびに山内のことである。大麻町姫田を中心に大谷・池谷・山内・萩原などは阿波藩有数の瓦産地であったと言われている。「阿万」は淡路島南東の沿岸部に位置する、南あわじ市阿万町のことである。阿万は、淡路瓦の生産地の一つであることがわかっている（註1）。「谷川」は和歌山県加太町との境にある大阪府岬町多奈川とその周辺地域の地名であり、そこで生産された瓦は谷川瓦と呼ばれていた。この3箇所の地名は瓦生産地であることから、当該遺跡へ各地から瓦が供給されていた証左と考えられる。

そのうち、谷川瓦は近世・近代にダルマ窯によって生産され、現在の大坂府・和歌山県・徳島県に供給し隆盛を極めていたことが知られている。出土瓦のうち谷川と刻銘する瓦は「谷川孫八」「谷川孫」「谷川瓦屋・・」「谷川嘉兵衛」「谷川瓦屋武右衛門」「商標登録泉州谷川瓦株式会社製造人辻清三郎」で

あり、4人が確認できる。この4人の名は谷川瓦窯発掘調査報告書（以下、報告書と記述する）に職人として記載されている。報告書には多くの職人名が記載されているが、報告書の表（表7-1）に瓦職人別の供給先とその年代が示されている通り、瓦職人によって供給先が決められていたかあるいは限られていたようである。また、報告書の表（表7-1）に記載されている「谷川孫八」に注目すると、「谷川孫八」は和歌山県海南市・下津町・有田市と徳島市の徳島城下町跡に供給していたことが確認できる。また報告書の表（表7-2）紀年銘を有するヘラ書き瓦一覧表をみると、和歌山県海南市淨念寺本堂の瓦に、明和3年（1766）の紀年名と「泉州谷川孫八」とヘラ書きされている。そのほか、同じく淨念寺鐘楼の瓦に、翌年の明和4年と「泉州瓦師孫八」、和歌山県海草郡下津町極楽寺本堂の瓦に、明和6年と「泉州谷川孫八」、そして同町教德寺本堂の瓦に、43年後の文化9年（1812）と「泉州谷川孫八」、和歌山県有田市善福寺本堂の瓦に、文化14年（1817）と「泉州谷川瓦屋孫八」の刻銘が認められる。数は少ないが、紀年名と人名が認められる貴重な資料である。この報告書の表（表7-2、表7-3）ヘラ書き瓦に見る瓦職人の自称の変化をみると「谷川孫八」は年代が下ると自称が「瓦師」から「瓦屋」へと変更していることに気づく。また、この変化は、「孫八」以外に「半左衛門」にも認められる。谷川瓦全体の自称の年代の変化に着目すると、「瓦師」は天和2年（1682）から天明7年（1787）まで存在するが、「瓦屋」は宝曆6年（1756）から文化14年（1817）まで存在しており「瓦屋」が後出である。また「瓦屋」から「瓦師」への変化は現存しないため、「瓦師」から「瓦屋」への変化が読み取れる。ただし、瓦師七兵衛は100年が過ぎても自分が変化しておらず、「瓦屋」へと変更していない職人もいたようだ。

「瓦師」と「瓦屋」の文字の違いのほかに、どのような意味の違いがあるのかは不明である。しかし、この「瓦師孫八」から「瓦屋孫八」への変化は、谷川の瓦職人全体の時代によるゆるやかな自称の変化と符合すること、明和年間と文化年間に40年以上の開きがあることから、この変化は年代判定の指標となりえるものと考えている。つまり、「瓦師孫八」の年代は、明和年間（1764～1772）を中心にして、谷川瓦の「瓦師七兵衛」が自称する最後の天明7年（1787）頃までと考えられ、「瓦屋孫八」は天明7年の後から、文化年間（1804～1818）を中心とした頃と考えられよう。

ちなみに、この自称の違いは年数の開きを勘案して、その背景には職人の代替わりがあったと推測する。当該調査から出土した刻印瓦のうち、谷川瓦と考えられる瓦のヘラ書きは「瓦師」は認められず、「瓦屋」のみが出土する。瓦屋と刻印される瓦は「谷川瓦屋右衛門」「谷川瓦屋嘉・・」「谷川瓦屋」である。このうち「武右衛門」は、報告書の表3のとおり明和4年（1767）に「孫八」が「瓦師」と自称する時に、すでに「瓦屋」と自称している職人であるが、当該調査出土の刻印瓦が「瓦屋」ばかりであることを考えると、「瓦屋右衛門」は紀年銘が遺る寛政11年（1799）に製作した年代に近いと考えられる。また「谷川瓦屋嘉・・」は別の軒丸瓦や飾瓦に「谷川嘉兵衛」の刻銘が確認できることから、「谷川瓦屋嘉兵衛」であったと考えられる。「嘉兵衛」は報告書の表3に享和2年（1802）に「瓦屋」と称しているとある（註2）。出土瓦には「谷川孫八」は瓦師・瓦屋どちらも刻印されていないが、「瓦屋」ばかりが出土し、また出土する「武右衛門」「嘉兵衛」が先述のとおりであると勘案すると、当該遺跡から出土する瓦の「谷川孫八」は19世紀代に活躍した「谷川瓦屋孫八」であると考えられよう。つまり、当該遺跡から出土した「瓦屋」「孫八」「嘉兵衛」「武右衛門」の刻銘をもつ瓦の年代は、刻銘瓦を整理すると概ね18世紀末から19世紀前半におさまると考えられる。この年代は、出土した遺構ならびに遺構面（第2遺構面）の年代（18世紀後半～19世紀前半）とほぼ合致する。

「瓦屋」と自称する職人は谷川瓦の職人だけでなく、大阪府堺市を中心とする堺瓦の職人も「瓦屋」と自称している。瓦職人の株仲間について記された『大阪瓦屋仲間記録』と呼ばれる一連の文書には、寛政2年（1790）の「大阪売瓦師仲間入願写」、寛政10年（1798）の「瓦方名前切替帳」、文化7年（1810）の「堺瓦屋仲間格式定帳」、文政4年（1821）の「堺瓦屋瓦下部名前帳」にて一合になっている。これらの文書には瓦師から瓦屋への変化が読み取れる。また堺産の刻印瓦の年代は18世紀末から19世紀代を中心とする年代と考えられており、株仲間の記録の年代と合致する。ただし、後述する淡路瓦を生産した津井村の文書には、享保10年（1725）・天保5年（1834）に瓦師の文字が認められることから、広く呼称の変化が認められるわけではないようである。

そのほか、巴文軒丸瓦の凸面に「・・孫右衛門」と判読できる。これは徳島城跡（鷺の門地区）出土の瓦にも同様のヘラ書きで「谷川孫右衛門」とあることから、当該調査資料も同様に「（谷川）孫右衛門」であろう。ただし、「孫右衛門」の名は谷川瓦の職人に認められない。

「谷川瓦株式会社製造人辻清三郎」とあるが、報告書には明治37年の資料に辻清三郎の名が認められる。また、谷川瓦は、明治17年に宮内省へ皇居造営用瓦の見積書を提出するなど、全国的に名が広まった。これに便乗する業者が出てきたことから、明治22年に谷川瓦製造者すべてが商標登録し株式会社組織の会社を設立したためである。④は谷川七兵衛のことか、「い（〇で囲む）」は「谷川伊兵衛」のことか判然としない。稻追二東文の中には、「谷川孫八」「谷川嘉兵衛」「い（〇で囲む）」「④」「谷・・」とある。谷川瓦で生産されていたといえるだろう。

次に淡路瓦と考える「阿万忠改」の刻印瓦が出土した。阿万は淡路島の南あわじ市南端部の海岸沿いの地名である。淡路瓦のうち、淡路島南西部の津井から阿万に瓦生産が伝えられた。「阿万忠改」は「阿万」の忠の文字をもつ職人名と思われる。そのため「三忠」「三忠改仕入」「忠」の刻印瓦は、これらも阿万での生産の可能性が考えられる。また、享保10年（1725）「御国中瓦師御願控帳」の津井村及び阿万村に関する部分には、津井村や同村出身の職人名と、津井村から阿万東村へ移住し瓦生産を行った「与右衛門」との名が認められる。与右衛門と同一人物と思われる名が「与右エ門改」として軒棧瓦に刻印されている。この「与右エ門改」の瓦も阿万産の可能性がある。

以上、「谷川」「阿万」「山内」やその他の刻印された瓦をみてきたが、その生産地の同定には、刻印を頼りに調査することが大事であると考える。当該調査から出土した「谷川嘉兵衛」の刻印（第207-1図695～699）は、報告書掲載の「谷川嘉兵衛」の刻印と酷似しており、谷川窯から運ばれてきたことを明確にしている。そして次に瓦の胎土を比較検討することが、よい立証になるとを考えている。（註3）

そのほかの刻印された瓦の文字も、瓦職人の名や、名や屋号にちなんだ記号と考えられるが、判然としないため、資料を掲載することでその責を果たす。

註1：谷川瓦については、『谷川瓦調査報告Ⅰ』（以下、報告書と記す）を基に検討した。特に刻印瓦については報告書の資料編を参考にしたところが大きい。

『谷川瓦調査報告書Ⅰ—門瓦製造所・歌坂喜代一瓦窯—』大阪府泉南郡岬町教育委員会 1992

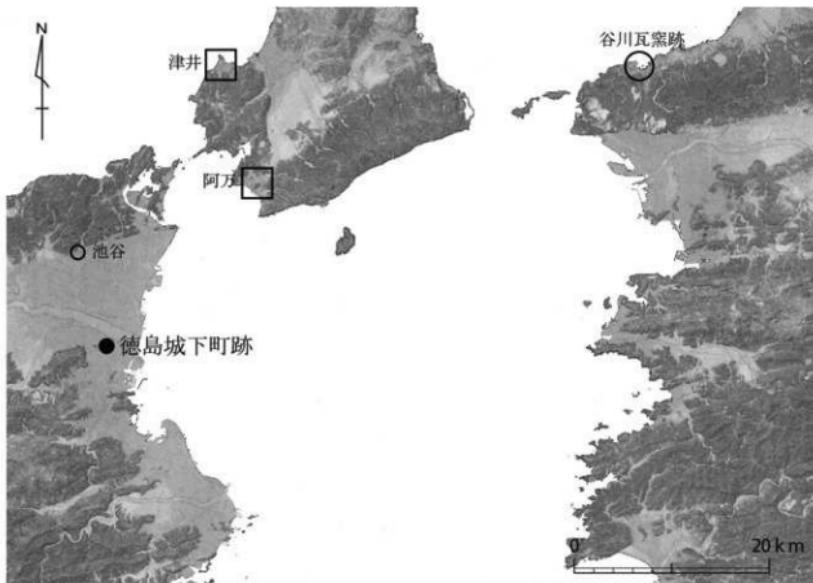
註2：表7-3には享和2年（1802）に「瓦屋嘉兵衛」とあるが、符合するはずの表（谷川瓦窯報告書の表2）の同じ紀年銘の瓦職人は「泉州淡輪村瓦屋□兵衛」とある。表からは「嘉兵衛」「伊兵衛」どちらも考えられる。

註3：白石純「徳島城下町跡出土瓦の胎土分析について」『徳島城下町跡徳島町1丁目地点 第88集』

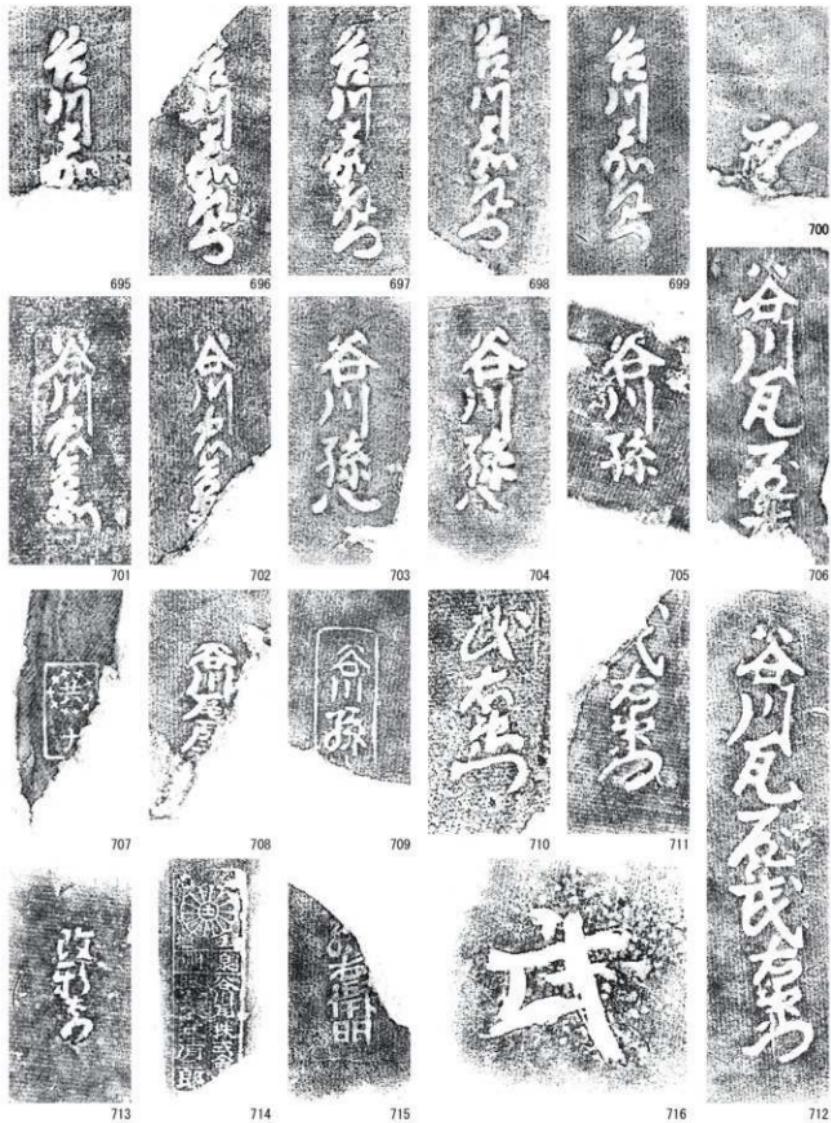
2016には、「谷川」刻印の瓦と「三忠改」刻印の瓦の成分を基にすると、異なることが推定されている。それは、すなわち谷川瓦と淡路瓦の生産地による胎土の違いを表していると考えられる。

#### 参考文献

- 石尾 和仁「「阿万」の刻印瓦について」『新蔵町3丁目遺跡徳島保健所地点』第31集 2000年  
前川 浩一「谷川瓦（大阪府泉南郡岬町）」『関西近世考古学研究11』2003年  
佐久間貴士「近世刻印瓦と瓦屋仲間」「歴史懇談』6号 1992年  
嶋谷 和彦「堺・大坂出土の刻印瓦—堺瓦を中心に—」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第27回）資料』1993年  
北山 學「淡路瓦の歴史—江戸時代を中心に—」神戸新聞総合出版センター平成27年2015年



第206図 刻銘瓦生産地



第207-1図 瓦に施された刻銘1（縮尺等倍）



第 207-2 図 瓦に施された刻銘 2 (縮尺等倍)